

パイボ



向山貴彦



studio
ET CETERA

1時間目・「学級新聞戦争」

目次

プロローグ

第一話 金曜日

第二話 土曜日・朝～昼

第三話 土曜日・夕方～夜

7

11

47

95

(第四話以降は二〇一九年公開予定です。)

杉山工作（パイポ）



大村健太（ぼく）



イラスト 平山けいこ

プロローグ

「面白いもの」のつくりかた

四月。ぼくたちが六年生になって、二週間ほど経った頃のことだった。

今思えばちよつと奇妙だけど、ぼくはそれまでパイポのことを知らなかった。一応言っておくと、「パイポ」っていうのは本名じゃなくて、ニックネームだ。本当の名前は、杉山工作。特に目立つ名前じゃない。でも、ぼくにはこの名前は誰よりもダイナミックで、派手で、とんでもないものとして記憶されている。

理由はいろいろあるけど、やっぱり一番思い出すのはあの事件——のちに「学級新聞戦争」の名で、生田小学校の歴史に語り継がれる出来事だ。

ここでちよつと一呼吸置いて、考えてもらいたい。

みんな「学級新聞」っていうと、どんなものを思い浮かべるだろう。大きな模造紙。マジックペンで書いた、歪んだタイトル。内容はたいいていクラスの誰かの活躍や、先生が喜ぶような当たり障りのないアンケートなんじゃないだろうか。間違つても「クラスで一番殺りたい奴ランキング」なんか載らないだろう。もしそれを、一読者として——誰の知り合いでも、クラスメイトでもないとして——読んだら、どう思うかな。

面白い？

今、うなずいた人は、この先を読む必要はない。そういったものを面白いと思えるのは、きつととても幸せで、そして優しい人だ。言い換えれば、すごく大人な人。でも、ぼくはそうじゃない。ただの子供だ。だから、パイポを真似てはつきりこう言おう。

「クソつまんねえ」

うん。ひどいよね。

でも、これがパイポってやつなんだ。

ついでに、このあとに「こんなもん人類の負の遺産」とか、「おれなら千倍うまく作れる」とか、多少、いや、かなり大げさな表現が続くと、よりパイポらしい。パイポはいつだって大きなことを言う。そして、それを実行しようとする。

この物語は、ぼくとパイポの出会いと、それから生田小全体を巻き込んだ大事件の記録を、多少の誇張と修正を加えて（こう言わないと権利とかがうるさいとパイポが言ってた）書き留めたものだ。

ぼくはこのことを、「面白いもの」の本当の作り方を後世に伝えるために書き残したい。

何せ世の中には、たくさんのが溢れている。でも、人間の寿命自体は、ぼくらの親やその親たちとそんなに変わったわけじゃない。となると、その中で何を見るか、何をするか選ぶのが、とても大事になってくる。作り方を知っていれば、選ぶのもうまくなる。

つまらないものを見て、時間を無駄にするか？

本当に面白いものを見付けられるか？

その選択は、いつだつてぼくらに任されているんだ。

ぼくらの挑んだ学級新聞。その過程と結果を、楽しんでもらえるとありがたい。

生田小学校六年

大村健太

第一話 金曜日

普通のひと

「普通だな」

と、いうのが、ぼく——大村健太が最初に聞いた感想だった。

「うん。普通だ」

「すげー普通」

六年二組の悪友、オルツと新座がそう続けた。オルツは、本名は五十嵐昌哉っていうけど、誰もそう呼ばない。代わりに流行のゲーム「克蘭・デステイニー」の中で使っているハンドルネームが、あだ名になって定着している。新座は新座優祐。絵が得意な上に、センスのいいイケメンだと女子から評判で、「王子」なんて呼ばれている。正直、新座が何故ぼくらとつるんでいるのか、ぼくには全く分からなかった。

「どっから見ても普通だなー」

「隙のない平凡っていうやつだね。この線なんか、特に普通」

「もういいってば！」

オルツと新座が手の中の紙切れをひっくり返ししながら「普通」と繰り返すのに、口を挟んで紙切れを取り上げる。手描きのA4用紙二枚をホッチキスで留めたそれは、クラスの学級

新聞だった。ぼくの所属する班は今月、その編集係に任命されていた。しかし、他の編集係は塾や習いごとを理由に早々に作業を逃げてしまったので、実質、ぼくはほとんど一人でこの学級新聞を作った。

その結果が、現在というわけだ。

「こいつ、学力テストも全教科、平均点ぴったりだったんだぜ。くそウケる。普通すぎて気持ち悪いんだけど」

オルツがぼくの方を指差して、鼻で笑った。言われる度に、「普通」という言葉が、ぼくの頭に石みたいな形で乗っかってくる。勉強も運動も普通すぎて、あだ名すら付かない。それがぼくだった。

「でも、ほら！ ここんとこイラスト入ってるんだよ。すごくない？」

「新聞にイラスト入るのって、普通じゃないのか？」

「だよなー。てか誰だよ、この変なキャラ描いたの」

「変って……三戸さんだよ。隣の席の」

きょんとした顔で尋ねてくる新座に、答えて言った。新座がひどく意味ありげな口調で「ふううん？」と返す。

「三戸さんですってよ、奥さん」

「あらやだ。大村さんったら三戸さんに気があるのかしら。やあねえ」

井戸端会議の主婦よろしく、二人がこそ語り始める。苛立ちと恥ずかしさが募って、ぼくはつい大声を上げた。

「もう！ そんなに言うなら、二人も手伝つてよ！ 学内対抗の学級新聞コンテストなんだよ!? 二人と同じ班でしょ！」

そう。何を隠そう、逃げた編集係というのは、まさにこの二人のことだった。他には女子が二人いて、三戸さんにはイラストを頼むことができたが、もう一人の椎名さんはしばらく風邪で休んでいた。

「だーかーらー。言っただろ、おれ克蘭でいそがしーんだって。もうすぐコロシウム始まるんだよ」

「おれも……塾あるんだよね」

二人が顔を見合わせ、軽く肩をすくめて言っただ。それを聞いて、ぼくの声のトーンが下がる。「ひどいよ。二人とも、ぼくと三戸さんに押しつけてさ」

「いいんだよ。お前に任せとけば普通にできんだから。普通が一番だって。すげえじゃん、締め切りより前にほとんどできてんだぜ？」

オルツが、多少強めにばしつとぼくの肩を叩いた。新座も「そうそう」と相槌を打つ。ぼ

くはこの場に味方は誰一人いないことを痛感した。と同時に、新座が学級新聞をぼくの手に返してくる。

「じゃ、おれ帰るよ。塾が始まるから」

「おー、おれも。コロシアム始まるから」

「そんな——」

オルツが「あばよ、庶民」と言いながら、ランドセルを右肩にかけてドアの方へと歩き出そうとする。その時だった。廊下の方から、バタバタという足音と、「ちよつと！ ちよつと！」と、慌てた様子の女子の声が聞こえてきた。

「まだ、まだ帰らないで！ みんな！」

直後にドアの所に、息を切らせた青山さんが姿を現す。その後ろから、「こら！ 廊下は走っちゃ——」という榎原先生の声が追いかけてきた。でも、青山さんは構っていなかった。それどころか、興奮を隠しきれない様子で手の中の紙の束を振り上げて、ぼくらに向かって言った。

「大ニュース！ 一組の新聞、すごいよ!!」

そして、ぼくもそれを目にした。

一組の新聞

残っていた生徒達が、一斉に教卓の周りに詰めかける。ぼくも駆け寄った。その間にも、みんなの感心した声が聞こえてくる。

「すげー！」

「何これー」

教卓の上に広げられた一組の学級新聞は、とんでもないものだ。大きなサイズの紙を二つ折りにしたもので、すべてパソコンでタイプされている。一面にはきつちりとしたレイアウトの上に、『山根くん、水泳大会優勝おめでとう！』と大きな文字が躍っていた。

とても小学生が作る学級新聞のレベルじゃない。

さながら、本物の新聞を小さくしたような出来映えだ。そこへ、やっと追いついてきた担任の榊原礼子先生が、息を切らせながら入ってきた。

「先生、一組の新聞！ すごい！」

誰かが大声で言った。先生が戸口にもたれかけて、呼吸を整えようとする。

「わ、分かってます。職員室でも、話題になってたもの……。でも、あんたたち、敵に塩送ってんじゃないわよ！」

榊原先生が体勢を立て直し、腰に手を当ててびしっと言った。

「一組の新聞は確かにすごいけど、うちの新聞だって、けっこうやるんだから！　ね、大村くん!?」

先生の視線がぼくの方を向いた。オルツと新座もこつちを振り返り、微妙な笑みを浮かべる。とっさに反応できずにいると、先生はさっさと視線を外して続けた。

「コンテストの締切は来週の木曜だからね。それまでクラスのみんなも協力して、しっかり仕上げて。誤字脱字があつたらマイナス点だからね。あと、杉山くん？」

この騒ぎに加担せず座っていたボサボサ頭の少年が「はい」と答える。あまり聞き覚えのない名前に、ちよつと気を引かれた。

「科学コンクールの優秀賞おめでとう。作品は、もうしばらく教室に展示させてもらつていいかな？」

ボサボサ頭が小さくうなずく。ぼくは先生の視線を追つて、教室の後ろを振り返ろうとした。でも、その前に先生がパンと大きく手を叩く。

「じゃあ、今日はこれで解散！　みんな週末を楽しんでね。宿題、忘れちゃだめよー！」
「こはーい！こはーい！」

生徒達が元氣よく答え、再び教室が喧騒に包まれる。ぼくはこつそり一部取つておいた一

組の学級新聞を、さつきオルツ達が放り出した。多くの学級新聞——という名のチラシの裏みたいなもの——と一緒にランドセルにしまい込んだ。そして帰ろうとすると、再びオルツと新座が寄ってくる。ニヤニヤした顔つきに、多くの肩が落ちた。

「あーあ。どうしよう」

愚痴がこぼれる。新座が何でもないように答えた。

「別にいいじゃん、普通で」

「だよなあ。別に、優勝したからってどうなるわけじゃねーし。そもそも普通じゃねえやつしか、普通じゃねえもんは作れねえんだよ。ほら、ああいうの」

そう言つて、オルツが後ろの壁を指差した。そこには、さつき先生が言っていた科学コンクール優秀賞の作品が展示されていた。

「杉山のやつだね。よく作つたなあ、あれ」

新座の感心した声音で、ぼくも初めてまじまじとそれを見た。「箱の中の海」と題された展示物は、横に一メートル、縦に三十センチ近くあつて、水中には沈んで廃墟になった都市があつた。

見ているうちに、小さなモーター音がして、海全体が傾く。同時に台座に仕込まれた砂が流れて、さああ、という心地よい波音を作り出していった。

「ほんとだ……。すごい」

近付くと、横に説明書きが吊ってあった。パソコンで作ったもので、『箱の中の海』 生田小学校六年 杉山工作」というタイトルが表紙に印刷されている。杉山工作。クラスが変わったことを差し引いても、あまり聞いたことのない名前だった。ぼくはパソコンで作られた説明書きを取り上げてつぶやた。

「こんなの作れる人、生田にいるんだ」

「ちょっと前に転校してきたからな。おれは去年委員会で一緒だったけど、大村は知らないだろ」

その通りだった。ぼくとオルツは腐れ縁で、一年生の頃から同じクラスの記録を更新し続けていた。オルツが同じクラスでなければ、ぼくが知らないのは当然だ。

「じゃあ、杉山くんに新聞の記事、頼んでみようかな」

ぼくは勢い込んで言った。パソコンを持っているみたいだし、そんなすごい人なら、面白い記事が書けるかもしれない。でも、新座は渋い顔で首を横に振った。

「やめた方がいいよ。あいつ、すごいやなやつだから」

「やなやつ？」

問い返すと、新座が顔をしかめた。オルツが耳元で声を落として告げてくる。

「あいつ去年、杉山にだまされて金巻き上げられたらしーんだよ。煙草吸つてるところ、見たつてやつもいっぱいいるし」

「そうなの？」

思わず、顔が強張った。これまで生田小学校に、そんな悪いやつはいなかった。

「まあ、おれはよく知んねーけど」

オルツはそれだけ告げて、「そろそろ帰ろうぜ。腹減つてきた」と、教室のドアをくぐつていく。ぼくはどこか釈然としない気持ちでそのあとに続きながら、「箱の中の海」を振り返った。海がタプンと傾く。波の音が響く。こんなすごいものを作る人が——不良？

とても信じられなかった。

崩壊する日常

廊下をしばらく進んで昇降口に出る。いろんな学年の生徒達が混ざつて、「帰ろうぜ」「ね、今日うち来ない？」などと、大小様々な声が飛び交うのが聞こえてきた。その喧騒に耳を傾けながら、自分の靴箱にたどり着くと、冷たい声が耳元に届いた。

「大村くん？」

「ひゃっ」

とっさに小さく悲鳴を上げていた。横を見ると、女子の中でも目立つ存在の青山さんがすぐ側に立っている。女子という遠い存在が思ったより近くにいることで、心臓がいつもより速く脈を打ち始めた。

「ちよつと来てくれる？」

「な——なに？」

「いいから」

有無を言わず、青山さんが先に立って歩き出す。ぼくは視線でオルツ達を探した。でも、二人はすでに昇降口を出てしまったらしく、その姿は見当たらなかった。

「早く！」

青山さんに急かされて、もたもたと靴を履き替える。ついていくと、青山さんは足早に昇降口を抜け、裏門の方へ向かった。そして、裏門の傍らにある植え込みの窪みにぼくを呼び込むと、ポケットから携帯電話を取り出した。

「ちよつと、これ見て」

と、言つて、青山さんが携帯の画面を見せてくる。そこに映っているのは、三戸さんが描

いたキャラクターだった。その下には、こんな文章が載っている。

『呪いの画像。目が合ったら、一時間以内に誰かに送らないと死ぬ!』

「え、何、これ」

全身が凍り付く。そのあとに、じわじわといやな感じが胸に広がる。ぼくは普段、こういったものと縁がなかった。ちよつとした小突き合いくらいはあつても、嫌がらせとか、いじめとか、そんなのは生田小にはないと思つていた。

でも、ここにあるのは、間違えようのない悪意だった。

「誰が、こんな——」

「しつ。声おつきい!」

慌てて自分の口を押さえる。青山さんはちらつと校舎の方に目をやってから、あらためて小さな声で言う。

「一組の子から回つてきてた。学校出てから気が付いて、すぐに戻つてきたの。どーしよ、さやかが見たら傷付くよ。これ」

「先生に言わなきゃ。あ、でも、帰り道で携帯触つてたつて分かつたら怒られるよね」

ぼくの言葉に、青山さんは首を横に振つた。

「いいよ、みんなやつてるし。榊原先生なら、ちよつと叱られるだけだよ。一組の太田に見

付かったらマジでやばいけど」

そして、青山さんは「いこ」とぼくを促して、職員室に近い正門の方へ向かい始めた。ぼくもついていこうとしたが、ふいにぴこん、という音が耳に届いて足を止めた。その音は、すれ違った女子達の携帯から鳴っていた。

「やだ、何これ！」

「こわっ！」

女子達の口から、悲鳴のような声が上がる。そこへさらに、後ろからぴこんと音がする。振り返ると、隣のクラスの男子生徒三人が携帯を覗き込んでいた。

「うえ。何これ」

その間にも、あちこちでぴこん、ぴこんという着信音が鳴っていた。マナーモードの、ブーツという音も聞こえてくる。束の間、青山さんと顔を見合わせた。

「さやか……」

青山さんが悲痛な表情でつぶやいて、急ぎ足で歩き出す。足取りはだんだん駆け足になって、正門が見えてきた。でもそこで、突然青山さんが足を止めた。

止まることができず、かなりのスピードで青山さんの背中にぶつかる。いつもなら「何やってんの！」と怒声が飛んでくるところだったけど、青山さんは何も言わなかった。ぼくは不

安が募るのを感じ、青山さんの後頭部に問いかけた。

「ど、どうしたの？」

青山さんは答えることなく、青ざめた顔で道の向こうをじつと見ていた。ぼくも唾をごくつと飲み込み、青山さんの肩越しに向こうを覗き込んだ。

正門を出た、ちょうどその場所。

そこに、携帯を手に立ち尽くす三戸さんの姿があつた。

「さやか……」

「……アオ」

三戸さんが顔を上げる。

その表情で、ぼくも青山さんも、三戸さんが何を見てしまったか分かった。

「もしかして……そっちにも来てるの？」

独り言のように、三戸さんがつぶやいた。青山さんと視線を合わせる。そのあとで、青山さんが無理に明るい声を出して言った。

「だ、誰かのいやがらせだよ。あんま気にしちゃだめだよ！」

「そうだよね……。だいじょうぶ。別に気になら——」

「やめろよ、気持ちわりー！」

言葉を遮って、ぼくらの横をさっきの男子三人組が携帯片手に通り過ぎる。そのうちの一人は、別の男子の鼻先に携帯の画面を差し出していた。

三戸さんは下唇を噛み締めてうつむいている。どうしたらいいか分からなかった。ぼくの新聞。手伝ってくれたのは三戸さんだけだった。

何か言わなきゃ。

そう思った。でもその前に、青山さんが明らかに動揺した様子で、ぼくを振り返って声を上げた。

「大村のせいだからね！ さやかに、無理にイラスト描けとか言うから——！」

その時、三戸さんが駆け寄ってきて、青山さんの腕をつかんだ。

「やめて！ 大村くんは悪くないよ。私が自分で、描くって決めたんだよ」

「でも——！」

その合間にも、他の生徒たちが辺りを通り過ぎる。何人かはこちらを興味深げに伺っていた。

「すっごいキモい絵だったね」

「だよね。誰が描いたんだろ」

女子二人が悪気のない声で言いながら去っていく。その姿が曲がり角の先に消えたあと、顔を上げると、三戸さんの頬に涙が流れていた。ぼくは胸が詰まるのを感じて、「三戸さん」

と言った。でも、そのあとに何と続けたらいいか分からなかった。三戸さんが今までに見たことのない、取り繕うような笑顔を見せて言う。

「大村くん。私の絵、ほめてくれてありがとう。でも、やつば変みたいだから……もう二度と絵は描かないね」

それだけ言つて涙を拭つたあと、三戸さんはくるつと振り返つて駆け出した。そのあとを、「待って！」と青山さんが追いかける。

「さやか！」

青山さんの声が響く。悲痛で、胸を潰すような声だった。ぼくは呆然とそこに立ち尽くしながら、その声の余韻にずっと耳を傾けていた。

一組の嘲笑

帰り道は、ぼくの気分と裏腹にきれいな夕暮れだった。

ぼくは悲しいような、腹が立つような、むちゃくちゃな気分を抱えて一人歩いていった。そのうちに、生田小のみんなのたまり場である駄菓子屋「天平」の前を通りかかった。

「あれ？ 大村編集長じゃん」

前を通り過ぎようとすると、店先のベンチからそんな声がする。一組の新聞班の連中だった。ぼくは注意を怠った自分を恨みながら、歩く速度を上げた。

「ほんとだ。よつ、編集長！」

冷やかすような声音で、一人の男子がそう言ってくる。うつむいてその場をやり過ごそうとしたが、そうは問屋が下ろさなかった。

「編集長、サインください」

「優勝するって言ってなかったつけ、編集長？」

「言ってた、言ってた。イラストレーターもいらつしやるとかで——」

「うるさいな！」

そう叫んで返すと、カシヤツとシャッターの音がする。見ると新聞班の一人が、携帯で写真を撮っていた。

「『大村編集長、逆ギレ』！」

「次回のスクープだな。こわつ、魔除け出しとこ」

もう一人の男子が携帯の画面をこつちに向ける。その画面には、さっきの三戸さんのイラストが大きく表示されていた。

一組の連中が一斉に爆笑する。ぼくは頭が真っ白になり、気が付くと、携帯をその手から叩き落としていた。

カシャン。

何かが割れるような音と共に、携帯が地面に落ちる。

「何すんだよ！」

血相を変えて、男子生徒がぼくの胸倉につかみかかった。その腕を何とかつかみ返したが、それでバランスを失って、二人して地面に転がる。そのまま店頭のベンチに一緒にぶつかり、上から奇妙に落ち着いた声が降ってくる。

「砂ぼこりを立てないでもらえるかな」

高級そうなスニーカーが目に入り、視線を上げると、他の子よりもだいぶ高そうなブランドものの服の上に、眼鏡をかけた特徴的な顔が載っていた。ぼくはつかんでいた腕から手を離し、頭上に座っている少年と目を合わせる。少年が何かのスプレーを口に当て、シュツという音を立てた。

「喘息に悪いんでね。それに、やかましいのも好きじゃない」

少年の顔に、不敵な笑みが浮かぶ。一組の何とかいう奴だ。一年生の時に同じクラスだったが、すっかり存在を忘れていた。覚えているのは、あの頃から給食費の支払いを「カード

で」と言うようなやつだった、ということだけだ。

「大村くん……だったよね？ 新聞つて大衆のものだよ。一旦、世に出したものをデイスラれたからつて怒るなんてクールじゃないな」

何も言い返すことができず、上体を起こして口元のほこりを拭う。そのぼくを見下ろしながら、そいつが続けて言った。

「暴力じゃ何も解決しないよ。悔しいなら、ぼくらよりも面白いものを作ればいいんだ。もつとも何もかもアベレッジな君には、ちよつと難しいかもしれないけど」

そう言つて、少年が立ち上がり、ぼくをおもむろにまたいで歩き去る。他の連中もそのあとに続いた。

「おれんちでゲームしようぜ！」

「それより、望遠鏡を見ようじゃないか。流星群が近いらしい」

一組の連中が駄菓子を手手に、騒ぎながら去つていく。その足音を聞きながら、ぼくは地面に座り込んで唇を噛みしめた。あいつの言つたことの意味は半分くらいしか分からなかった。でも、ここでの「アベレッジ」という言葉が、いい意味じゃないことは分かった。それに、ぼくの作つた新聞が「面白くない」ということも。

——普通だな。

オルツと新座の感想を思い出す。同時に、「ごめんね」とつぶやく三戸さんの悲しい顔が頭の中に浮かび上がった。

普通。

面白くない。

でも、「面白い」って何なんだ——？

そう考えた瞬間、頭に浮かんだのは、あの「箱の中の海」だった。

杉山くんとのお会い

その場所に着いた時には、日はほとんど暮れていた。

町の反対側にある、文化台の丘の上。ぼくらが生まれるずっと前は竹藪の山だったらしいそこは、片側はとつくの昔に開拓されて、住宅地になっていた。そのてっぺんの家の前に、ぼくは立っていた。

「杉山」という表札が目の前にある。下にインターホンのボタンが付いていた。ぼくは大きく息を吸い、ボタンを押そうと手を伸ばした。この家の位置は、オルツに携帯で聞いた。オ

ルツは「コロシアムの最中だぞ」と文句を言いながら、片手で位置を検索して地図を送ってくれた。

『はい？』

女の人の、ちよつとよそよそしい声がインターホン越しに聞こえてくる。ぼくはちよつと慌てて、言葉を紡いだ。

「あの！ ぼく、杉山くんの友達——じゃなくて、クラスメイトで、大村っていうんですけど——！」

『工作なら、裏よ』

それだけで、プツツとインターホンが切れる。裏？ 裏つて——と、周囲に目をやると、あまり手入れされていない庭の脇に、車一台通れるくらいの道があるのが目に入った。いいのかな、と戸惑いながらその道を進んで、家の裏側を覗き込む。

そこに、とても不思議なものがあつた。

一台のキャンピングカー。全体に錆び付いて、側面には植物のツタなんか絡まっている。近付くと、ドアの所にこんな手描きの看板がぶら下がっていた。

『セーフハウス…関係者以外立入厳禁（注意…家族は関係者ではない）』

「何だ……これ？」

看板をひっくり返しながら、怪訝な思いでつぶやく。同時に、窓の所に突然人影が現れた。ぼくは思わず「わっ!？」と声を上げて、後ろに飛び退いた。

人影が首を傾げる。そのボサボサのシルエットに見覚えがあった。

「す、杉山くん？」

窓の向こうに声をかけると、人影が一旦消える。数秒の後、ガタンと音がして、キャンピングカーの屋根のハッチが開いた。

「誰だ？」

キャンピングカーの中から洩れる光で、立ち上がった人影が今度こそはっきり見える。ボサボサ頭のシルエットは、確かに教室で見たあの少年だった。

「杉山くん！ ごめんね、勝手に入ってきて。同じクラスの大村だけど、実は杉山くんにお願いがあつて——」

少年は頭上からぼくをじつと見下ろしていた。その視線に負けそうになりながら、ぼくはためらいがちに続けた。

「あの……うちのクラスの学級新聞、手伝ってもらえないかな」

「なんで、おれがそんなことしなきゃならないんだ」

「なんでって」

杉山くんが冷たい声で言い放って、ぼくの言葉が途切れる。なんで——なんでだっけ、と記憶を辿る。

「学級新聞なんか作って、おれになんのメリットがあるんだよ」

「ええと……一位になったクラスには、賞品出るらしいよ」

「メリット」という聞き慣れない言葉に馴染むのに、少し時間がかかった。「アベレჯ」に次いでよく分からない響きだったけれど、何かしら「いいこと」という意味だろう、と悟ることができてほっとする。

「どうせしょぼいノートか鉛筆だろ。いらねーよ、そんなもん」

「——じゃなくて！ すごかったんだ。科学コンクールの展示のやつ。かつこいいって思った。面白いって。あんなの、ぼくにはとても無理だから……」

だんだん声が小さくなる。杉山くんは何も言わない。

「面白いって、何か分からないんだ。ぼくは何をやつても『普通』だから」

いつの間にか、視線は地面を向いていた。肩から下げたランドセルが重たく感じられるのは、今日の授業で使った資料集のせいかもしれないし、さんざんけなされたぼくの学級新聞のせいかもしれない。

「子供の時からずっとそうなんだ。名前も普通だし、身長も体重も小六の全国平均だし。血

液型だって、一番多いA型だし……」

後半は、ほとんど独り言のようになっていた。杉山くんが動く気配はない。ぼくの話聞いていてどうかさえ、分からなかった。

「学級新聞だってがんばったんだけど、やっぱり普通のことしかできなくて……。三戸さんがひどいことされたのに、どうしていいか分からなくて。もつと面白いもの作ったら、何とかなる気がしたんだ」

そこまで話して、やつと顔を上げた。屋根の上で、杉山くんは腕を組んだまま、じつとこつちを見つめていた。ぼくはちよつと悲しい気分で笑ってから、続けて言った。

『箱の中の海』本当にすごかったよ。だから杉山くんなら、って思ったんだ。でも、ごめん。迷惑——」

「とりあえず上がってこい。そこからだと聞きづらい」

その言葉に、瞬きを繰り返す。何を言われたか分からなかった。杉山くんが「こつち」と、キャンピングカーの後部を指す。そっちへ回ると、金属製のハシゴが付いていて、屋根に上がれるようになっていた。

「早くしろよ」

急かされて、ハシゴをつかんで体を引き上げる。錆びたハシゴが足の下でミシッと軽い音

を立てた。その音が数回繰り返された後、ぼくは屋根の上にいた。

「わあ……」

そんな声が洩れる。ほんの一メートルちよつとの高さなのに、そこからだと辺りの風景はまるで違っていた。庭の端は金網のフェンスになっていて、切り立った崖が足元に見える。フェンス越しの夕暮れが足の下に広がって、まるで町全体がポケットにすっぽり入りそうだった。

「一万」

景色に見入っていると、ふいに杉山くんがぶつきらばうな口調で言った。振り返ると、きょとんと立ち尽くしているぼくに向かって、杉山くんが続けた。

「一万出したら、みんなが泣いて『読ませてくれ』っていう新聞作ってやるよ」

束の間、何も答えることができなかった。一万というのが、お金の一万円だと気が付くまで、しばらくかかった。そのうちに、杉山くんがふつと笑って、肩をすくめた。

「まあ、『普通』そこまではないよな」

この言葉に、かつと顔が熱くなる。気が付くと、とつさに言っていた。

「は……払う！ 払うよ！」

頭の中に、年明けにばあちゃんにもらつて以来、大事に取つてあるお年玉が思い浮かぶ。

ゲーム。マンガ。何だつて買える一万円。ばあちゃんも、好きなことに使えつて言っていた。「でも、本当にできるの!? 一組よりもすごいやつだよ!」

後悔を感じる間もなく、口が勝手に続けた。杉山くんがごそごそとポケットを探る。そして小さな箱を取り出して、細長い白い棒を慣れた手付きで口にくわえた。

煙草だ。

やっぱり不良なんだ。怖い人なんだ。ぼくの首筋がざわつく。恐怖と後悔が背中を駆け上がってきて、ハシゴを下りて帰りそうになった。そんなぼくの足を止めたのは、杉山くんの次の一言だった。

「面白いつてどういうことか、教えてやるよ」

それはぼくにとって、この上ない悪魔の囁きだった。

第一回編集会議

「それって、どんな——」

ごくつと唾を飲みながら、慎重に問い返す。杉山くんが片手を差し出してきて、グーとパー

を繰り返すような仕草をした。その意味を悟って、ぼくは即座に声を上げた。

「い、今、持っていないよ。明日払うから！」

杉山くんが疑わしげに眉を寄せる。それに「ほんとだつて！」と続けると、杉山くんが手を引つ込めて、煙草を口から離した。その時、おかしなことに気付いた。杉山くんは、煙草に火を付けていなかった。吐く息も、ぜんぜん白くなっていない。

「それ、煙草……なの……？」

思わず声が小さくなる。ぼくと杉山くんの間を、夕暮れの心地よい風がさつと吹き抜けた。杉山くんが何でもないように答える。

「んなわけあるか。ただの禁煙パイポだよ。考えまとめるのにいいんだ」

「パイポ」

ちよつとあつけに取られた思いで、ぼんやりと繰り返す。その響きと、杉山くんのイメージが、何となくすっと胸に落ちてきた。

「——パイポなんだ」

「そう言つてゐるだろ。とりあえず、座れ」

パイポが屋根の上の一角を指す。お風呂で使うようなウレタンマットがそこに敷かれていて、小さなテーブルと折り畳み椅子が置いてあつた。傍らには飲み物を入れる小型の冷蔵庫

まである。ぼくは大きく目を見開いた。

パイポが「うーん」と唸りながら、ギシッと音を立てて折り畳み椅子に座り込む。それから頭のとつぺんを激しくがりがりとかきむしった。

なんだ、この人。

ぼくは不審な思いで、その様子を見守った。やがて大きく息を吐く音と、「まあ、いつか……利用価値はあるな」という呟きが聞こえてくる。

パイポが冷蔵庫のドアを開ける。そしてドクターペッパーのペットボトルを二本取り出すと、そのうちの一本をぼくに向かって差し出した。

「んじゃ、契約祝いつてことで」

ペットボトルを受け取り、促されるまま乾杯の形にボトルの上部を合わせると、ぺこんと間拔けな音がする。パイポからものをもらうというのがどういふことか、この時のぼくはまだ知らなかった。ただ、「何だか後戻りできなそうだ」ということには、徐々に気付き始めていた。

蓋をひねって一口飲むと、強い甘さと何とも言えない香りが口の中に溢れてくる。それを喉に送り込んでから、再び辺りを見回した。

「ここ、すごいね」

そんな感想が口をついて出る。夕日に照らされて、屋根の上も、パイポの顔もほんのり赤く染まって見えた。パイポが何でもないように、「そうか？」と肩をすくめる。

「とりあえず時間ないから、始めるぞ。面白い新聞、作りたいんだよな？」

「う、うん」

「本気だな？」

「もちろんだよ！ それで、一組の連中に目にももの見せてやりたいんだ！」

マットの隅に腰を下ろしながら、こくこくとうなずいた。マットはどこかの家の風呂場で使われていたものらしく、所々色が褪せていて、歴史を感じさせた。パイポが神経質そうに眉を寄せる。そして、歯を見せながら禁煙パイポを噛み締めて言った。

「んじゃ、作業を始める前にまとめとくぞ。本気で新聞を作るなら、おれたちは五つ問題点を抱えてる」

パイポが掌を広げて告げてくる。ぼくは真剣にその言葉に耳を傾けた。

「一つが『金』だけど、これはクリアしたって思っているんだな？」

言いながら、パイポがじつとこっちを見つめてきた。見透かすような鋭い視線に、「う、うん」と答えてうつむく。一万円で買えるものや、できることの映像が、一瞬間の中を駆け抜けた。それでも、引くわけにはいかなかった。

「だったら、もう一つは『人員』だ。何をやるにしても、二人じゃどうにもならないからな。聞くけど新聞班って、誰がいるんだ」

「ぼくとオルツ——五十嵐と新座。あと、三戸さんと椎名さんがそうだよ」

「そいつら、手伝ってくれるのか？」

口ごもるしかなかった。オルツと新座は、頼み込めば何とかなるかもしれない。でも椎名さんはまだ風邪が続いていると聞いていたし、三戸さんに至っては到底無理だった。黙り込んだぼくに対して、パイポがふーつと息を吐く。

「とりあえず来れそうなやつ、明日連れてこい。あとの三つの問題点はその時話す」

「分かった。六年二組学級新聞、編集会議って伝えるよ」

「いや。それはボツ」

パイポがさつくり切るように言った。ぼくの心に小さな刃が刺さってくる。

「それだと、読者層を六年生だけに限定することになるだろ。他の学年のやつも読みたがるようなものでないと、一組には勝てない」

ぼくは大きく目を見開いた。他の学年って——一年とか、二年も読むってこと？ 確かにコンクールは全学年を通してのものだったけど、そんなことは考えたこともなかった。気にしていたのはただ、自分達六年生と、先生の評価だけだった。

「じゃあ、どうしたら……」

「タイトルから変えればいい。おれたちのは『生田小学校新聞』だ」

生田小学校を代表する名前に、ぼくはパイポの顔を見た。それから無意識に眼下の町に視線を移して、生田小学校の場所を探した。でも、見つかったのは近所の安っぽいパチンコのネオンだけだった。

「ちなみにお前、一組の作った新聞、本気ですごいと思ってるか？」

「そりやそうだよ。本物の新聞みたいだったもん」

悔しいけど、そこだけは認めざるを得なかった。クラスみんなの「すごい」という声が耳元によみがえって、知らず知らず顔が強張るのを感じる。でも、次のパイポの言葉は、思っても寄らないものだった。

「でも、あの新聞って実際に読んだか？」

ぼくは言葉に詰まった。

そう言えば、何度も「すごい」と思ってパラパラとページをめくってはいたけど、記事そのものは一行も読んでいなかった。パイポが下唇を歪めてさらに言ってくる。

「読んでないんだな。一応聞くけど、なんで読まなかった？」

「なんでって……」

「あそこに載つてゐる水泳大会の結果なんて、興味なかったからだろ。誰々が絵の賞状取ったとか、中庭の花が咲いたとか、ぶっちゃけどうでもいいからな。違うか？」

口ごもったぼくの代わりに、パイポがものすごくはつきり残酷な事実を告げてくる。そうだった。新聞は読むものだった。当たり前のことなのに、すっかり忘れていた。パイポは折り畳み椅子に深々とたれかけ、さらに耳に痛い言葉を続けた。

「大人だつて、先生とか親つて立場じゃなかったら、あんな新聞誰も読まねーよ。だいたい、ただの情報誌にしたつて、もう少しやりようつてもんが——」

自分の作つた新聞が頭を過ぎつて、パイポの声が遠くなる。あんなにきれいな新聞を作つても、誰も読んでくれない。冷静に考えると、けつこう怖い事実だった。そのうえ、ぼくの新聞はきれいでさえなかった。

先生以外は気が付いていないはずだけど、ぼくの新聞には誤字がたくさんあった。修正液があればすぐに直せるのに、まあいいかと思つてほったらかしていた。タイトルの周りの枠線を清書し忘れたのも、新聞班の名前を入れ忘れたのも、発行日の日付が去年になつてゐるのも、みんな気が付いてゐた。それなのに、「誰も言わないから」というだけの理由でそのままにしていた。

ゆつくりと、自分の顔から血の気が引くのを感じる。オルツ達に新聞を見せた時、返つて

きた感想は絵や内容のことばかりだった。「普通」という言葉に抵抗しながら、その辺りを誰も指摘しないことに、こつそり安堵していた。

ぼくは卑怯だ。

「——でも、これから作るのとはそんなもんじゃない。本当に『面白い』学級新聞だ」

その言葉に、はっとしてパイポの顔を見た。

「本当に面白い……？」

「ああ。面白いものには二種類ある。『ただの面白いもの』と、『本当に面白いもの』だ。おれたちはこの後者を目指す」

「なんで？」

「普通じゃいやなんだろ。それよりさ」

パイポが一呼吸置いて、ドクターペッパーのボトルを煽る。そして、ぷはつと息を吐いてから続けた。

「なんでお前、そんなに新聞にこだわってるわけ？」

「なんでって——」

なんでだろう。

三戸さんがかわいそうだから。一組にリベンジしたいから。いろんな理由があつた。でも、

パイポが聞いているのは、そういうことじゃない気がした。

「なんでつて……よく分からないよ。でも、なんか、やりたいんだ」

「ふーん」

つまらなさそうな顔で、パイポがそれだけ返してくる。何となくがっかりさせたようで、ぼくは気まずい気分になるのを止められなかった。同時に、町全体にぼろぼろと夕方の音楽が鳴り始める。

トロイメライ。

五時の帰宅を促すメロディと、夕闇に沈んでいく町の風景が合わさって、ひどく切ない気分をかき立てる。ぼくも途端に不安を覚えて、ドクターペッパーを飲み干し、その場に立ち上がった。

「そろそろ帰らなきゃ。ジュースありがとう、パイポ」

「パイポ？」

ボトルを置いてハシゴの方へ向かおうとしたぼくの所に、怪訝な声が飛んでくる。そのあとに、パイポが首を傾げて尋ねてきた。

「それ、おれのことか？」

「うん、そうだけど」

パイポは不思議そうな表情を浮かべてこつちを見ていた。なんだろう——と考えてから、ぼくはこの少年を実際に「パイポ」と呼ぶのが初めてだということに思い当たった。でも何か反応するより先に、パイポがまた頭のとつぺんをがりがりと搔いて言った。

「まあ、いいけど。明日他のやつに声かけて、また来いよ」

「分かった」

そう答えてハシゴを下り、裏庭を横切り始める。その後ろから、パイポの声が飛んできた。「金、忘れんなよ！」

それに手を振り返して、かすかな胸の高鳴りを感じながら、駆け足で裏庭を抜けていく。パイポの言う「本当に面白い学級新聞」が作れるなら、一万円なんて惜しくない。三戸さんが喜んでくれて、クラスみんながすごいって言うってくれるなら、後悔なんてなかった。

面白いって、そういうことだ。お金じゃ換えられないことなんだ。

そう強く思つて、ぼくは家への道を走り出した。

第二話 土曜日・朝／昼

家を出てモアイ

翌日起きたら、めちやくちや後悔していた。

そりゃあ、確かに一組の連中に言われたことは悔しかったし、三戸さんのことを考えると申し訳ないと思った。でも、だからって、ぼくがそこまでする必要ないんじゃないか？――ベランダから入る朝の日差しを感じていると、そんな考えが繰り返し浮かんでくる。

「何ぼーつとしてるの、健太？」

焼けた食パンを片手に、お母さんが言ってきた。ぼくは内心ちよつと慌てながら、パンを受け取って「なんでもないよ」と返した。

「昨日は帰りが遅かったし、大丈夫なの、あんた？　いつちよまえに非行にでも走る気？」
「違うよ！　その――オルツたちとゲームしてて遅くなっただけだよ！」

何だかパイポのことを話すことができず、しどろもどろになりながら、食パンの片面にマーマレードを塗りたいくる。お母さんが腰に両手を当てて、ふーつと溜息を吐く。

「また新しいゲーム買ったの？　おばあちゃんのくれたお年玉、もう使っちゃったんじゃないでしょうね」

「そんなじゃないよ。克蘭だよ。いつもやってるやつ」

と、言いながら時計を見上げると、もう九時を過ぎていた。そろそろ行かないと、あいつらがうるさい。ただでさえ新聞のことで説得しなきゃいけないんだから、遅刻は避けたかった。

食パンを食べるスピードを上げる。パンくずがパラパラテーブルに落ちて、お母さんが嘆かわしそうに首を横に振った。

「ほんつと、飽きもせずによくやるねえ。とにかく、無駄遣いしちゃだめよ」
「分かってるよ！」

そう返して、テーブルを立った。ポケットの中でカサツという音がして、ばあちゃんの一万円が入っているのがはつきり分かる。手を突っ込んで感触を確かめると、ますます後悔が深くなった。

この一万円があれば、克蘭の最高級アイテム「クリスタルソード」が買える。装備品も一段階、いいものを揃えられる。そうしたら、オルツもぼくを同じギルドに入れてくれるかもしれない。

でも――。

考えながら、家を出て、生田二丁の坂を自転車でこぎ始めた。外は春らしい気持ちのよい晴天で、気分が浮き立つのを感じる。何だかい日になりそうだ――そんな気がし始めた所

で、坂の上から変わった服装の人が降りてくるのに気が付く。小豆色の袈裟を着たお坊さんだ。お坊さんがぼくの方を見て、「おはよう」と言ってくる。両手にはメロンでも入っているような、豪華な紫色の箱を抱えていた。ぼくは息を切らしてペダルを踏みながら、お坊さんに向かって返した。

「モアイ、おはよう」

片手を振ると、小学六年生らしくない、慈愛に満ちた笑みが返ってくる。同じクラスの吉田走——でも、ぼくらはみんなモアイと呼んでいる。理由は察して欲しい。モアイの家はお寺なので、週末には時々こういう格好で歩いていることがあった。

「家の手伝い？」

自転車のブレーキをかけながら聞くと、モアイは小さくうなずいた。

「ちよつと羽村さんとこに届け物」

「羽村さんって、三組の？」

「そう。うちの昔からの檀家なんだ。今月の初めにおじいちゃんが亡くなったから、いろいろ大変だね」

「そうなんだ。ぼくもこれから……ちよつと用事で」

何故かちよつとやましい気分になって言う、モアイがお坊さんのする独特の深いお辞儀

を返してくる。

「ごくろうさま」

いつもの大らかなモアイの笑顔。それを見ると、ちよつとだけ気持ちが楽になるのを感じた。

「ねえ、モアイ。お寺ではさ、後悔することをしそうな時ってどうするの？」

問いかけると、モアイは少し唇を尖らせて考えたあと、屈託のない笑顔で答えた。

「住職はよくビール飲んで、文句言って寝てるけど」

「……モアイのお父さん、豪快だからなあ。じゃあ、ぼく急いでるから行くね」

「気を付けて」

ぼくはまだ気持ちを決めかねたまま、自転車のペダルに足をかけた。でもこぎ出す直前に、ふと気になって、モアイに尋ねた。

「その箱ってかつこいいけど、何が入ってるの？」

モアイは笑顔で答えた。

「羽村さんのおじいさん」

なんか絶対、今日はよくない日だ。

その時、ぼくはそう確信した。

三人組の道中

いつもの待ち合わせ場所——生田神社の境内に着いたのは、ちょうど十時くらいだった。

遠くからでも、石段に座り込んだ新座とオルツの姿が見える。自転車置いて近付くと、オルツが携帯ゲーム機から一瞬だけ顔を上げて、「おせーぞ」と言ってきた。

「ごめん、ちよつといろいろあつて。あのさあ、学級新聞のことなんだけど——」
でも、二人ともすぐにまたゲーム機に視線を落として話し始める。

「オルツさあ、ちよつとその戦術くない？」

「何がだよ。弱点、ヒレなんだから有効だろうが」

「二人とも、ちよつと聞いて——」

「じゃなくて、魚系の敵なんだから電撃使えつて。ステージ砂漠なんだし」

「それ攻略サイトの情報だろ。この間の調整後は、全属性アップ武器の方がダメージ効率でかいんだよ。だいたいおれの武器だったら、」

「ちよつと！ 聞・い・て！ 欲しいんだけど!!!」

大声を上げると、やつと二人がこつちを見てくれた。同時に、新座の手の中から、プレイヤーの死を知らせる「ドーン」という音が響いてくる。

「あ、死んだ」

オルツがクールに言い放った。新座がくやしそうに呻く。

「くそー。しょうがない、天平いこうか。大村も来たし」

よいしょ、と新座が腰を上げ、オルツもそれに続く。

これはだめだ。

いよいよ危機感を煽られたぼくは、自転車に乗り込む二人に向かって一気に言った。

「あのさ！ 昨日見せた学級新聞のことなんだけど、あれ、もう一回作り直そうかと思ってるんだ！」

「へー」

「ほー」

ぼくの言葉をまったく相手にしないまま、二人は天平に向かってこぎ始めた。ぼくも急いでそのあとを追いかける。

「それで、パイポ——いや、杉山くんがお金払ったら手伝ってくれるって——」

「っていうか、全属性って強いわけ？ 相当レベル高いやつでないと、意味ないって聞いたけど」

「別アカ持ってたなら武器の受け渡しできんだよ。おれが持つてるやつなら、即死狙える」

ああだこうだと、二人はクランの話に夢中になっている。その合間を縫って、ぼくは「新聞が――」、「杉山くんが――」と、何度も学級新聞のことを切り出そうとした。でも、全てが徒労に終わり、そのうちに天平の看板が見えてくる。

昨日の苦い記憶がよみがえって、慎重に遠くから様子を伺った。表のベンチには誰も座っていない。店内も混み合っている様子はなかった。この分なら大丈夫かな、とお店の前に自転車を止める。すると、中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「おぼちゃん、天平焼きくださーい」

一瞬いやな予感がして、オルツと新座の後ろから店内を覗く。駄菓子やカード、くじ引きなんか所狭しと並んだ真ん中に、いがぐり頭が立っている。ぼくはほっと胸をなで下ろした。同時にオルツが言う。

「なんだ。ヤッピーじゃん」

それを聞いて、ヤッピーこと八頭がこつちを見た。三、四年の時の同級生で、六年一組だけど、ぼくもオルツもけつこう仲がいいやつだ。ヤッピーは後ろにいるぼくに目を留めるや否や、「ああ、大村あ」と情けない顔になる。

「お前、だいじょうぶかよう。昨日、うちの新聞班にやられたそうじゃんか」

その言葉で、オルツと新座がやっとこつちを振り返った。ぼくは少々情けない気分で、照

れた笑いを浮かべながら言う。

「別に、やられたってほどじゃないよ。ちよつと新聞のことで——」

「あいつら、ひどいよなあ。自分たちがカッコイイ新聞作ったからつてさあ。二組をあんな風に言うことないじゃんか、なあ？」

「おい。なんだよそれ」

オルツがちよつと真面目な声になって言った。さらに新座も、険しい表情を浮かべてヤッピーに詰め寄る。

「何て言つてんの、新聞班のやつら」

「何てつて……二組は無能の集まりだから敵じゃないとか、低学年以下の壁新聞とか。あ、あと絵のセンスゼロとも言つてたなあ」

ヤッピーがわざわざ一つ一つ、思い出しながら教えてくれる。どれもぼくが直接言われたことじゃないけど、そんな風に言ってるんだ——と思うと、ムカムカしてくるのを止められなかった。でも、ぼくが何か言う前に、オルツと新座が声を上げた。

「何だそれ！ 一組とか、目じゃねーんだけど！」

「そーだ！ こつからうちの新聞、本気出すからな！ なつ、大村！ あれ、作り直すんだよな!!」

「う、うん……杉山くんが手伝ってくれるって言うし……」

「ほら見ろ！ 新聞班の連中に言つとけ、勝つのは二組だからな！」

「おー、リベンジしてやるぜ！」

二人が威勢よく言つて、「じゃ、杉山のところ行くか！」とこつちを振り向く。意外な展開に、ぼくは口を開けたまま回れ右をするしかなかった。

第二回編集会議①

数分後、ぼくら三人はパイポの家にとどり着いた。

自転車を家の門にチェーンで留めていると、新座がインターホンを押そうとする。昨日の女の人の声を思い出して、ぼくは何となくそれを制した。

「なんだよ。こつちじゃないの？」

と、怪訝そうな二人を促して、裏庭へ続く道を進む。そして「こつち」と角を曲がった途端、二人が息を呑む気配がした。

「すっげ。何これ！」

「超かつこよくね？ キャンピングカーってやつ？」

新座とオルツが口々に言つて、ぼくの顔を見た。そりやそうだ、驚くよね——と、ぼくは力なく笑つてみせる。そこへ、ガタンと音がして、キャンピングカーの屋根が開いた。

「なんだ。来ないと思つてただけだな……」

パイポのボサボサ頭が、ぼくを見下ろして溜息交じりに告げてきた。さつきまで後悔していたのが後ろめたくて、思わずぼくの声が大きくなる。

「く……来るに決まつてるよ！」

「一晩寝て、気が変わらなかったのか？」

「……ぜんぜん。少しも変わらないよ」

心の中にいるもう一人の自分があきれているのを無視して、ぼくはパイポに言い放つた。

しかも、その同じ自分がお金の入ったズボンのポケットにまつすぐ手を伸ばそうとしている。まるで一時的にエイリアンに体に乗っ取られているみたいだった。

「はい、一万円。ちゃんと持つて来たよ」

エイリアンが一万円札を取り出して、パイポに向けて差し出す。周りでオルツと新座が「おいおい」「まじか？」と驚いた声を上げていたが、もう引つ込みが付かなかった。パイポが挑戦するように、じつと目の前のお札を見つめ返してくる。

「本当にいいのか？ たかだか学級新聞だろ。後悔するぞ」

「しないよ」

パイポがもう一度溜息を吐き、屋根の上から頭を引っ込める。数秒後、横の窓が開いて、そこからパイポが顔を出した。

「ドアは開かないんだ。こつから入ってこい」

そう言つて、パイポが窓を一番上まで押し上げて固定した。窓の下にはブロックが置いてあつて、窓枠まで上がれるようになってゐる。そのブロックに恐る恐る足を載せて、窓の内側へ体を引き上げると、斜めに固定された鉄板が目に残る。

次の瞬間、滑り台の要領で体が鉄板の上を滑り降りて、気が付くとキャンピングカーの内部へ降り立っていた。

窓の外でまたも「すげー！」と歓声が上がる。そりゃあ、この入り方がかつこいいと思わない男子なんていなかった。でも、それより初めて目にしたキャンピングカーの内部の方がもつとすごくて、ぼくは思わず周りの光景に見入った。

一番最初に目に付いたのは、馬鹿でかい世界地図が貼られた天井と、そこから糸で吊り下げられたUFOや鯨やロケットの模型だつた。プラノドンのビニール風船なんかも下がっている。その向こうの壁には、窓を塞ぐようにいろんな雑誌の切り抜きや、設計図のような

ものがびつしり貼り巡らされて、床には元素記号表の印刷されたカーペットが敷かれていた。さながら手作りの博物館か、でなければ悪者の要塞のような雰囲気だった。

「んじゃ、一万」

部屋の中央に立っていたパイポがクールに言つて、手を伸ばしてくる。自分がお札を差し出す動きがスローモーションに見えた。最後の一瞬、お金を引き戻して「ひやつほおおお！」と叫びながら窓から飛び出したい衝動に駆られたけど、実際にはすんなり一万円札をパイポに手渡ししていた。

「やべー。杉山んちつて金持ち？　なんかすぐくね、これ？」

鉄板を滑り降りてきたオルツが、さつそく部屋の隅にあるパソコンとプリンタのセットに興味を示しながら言つた。パイポが「そんなんじやねーよ」と肩をすくめる。その直後、新座が滑り降りてきて、オルツの尻にぶつかつた。オルツが「いてっ」と声を上げる。

「――あれ？」

そこで初めて、パイポは新座に気が付いたみたいだつた。

「なんだ。新座も来てたのか」

「別に、成り行きだよ」

新座がちよつと怒つたような声で答える。そう言えば、以前にお金をだまし取られたこと

があるとか言っていた気がする。新座が続けて言った。

「お前さ、ちゃんと一組に負けない新聞作れるんだろうな。大村から金取つといて、できなかったとか言うなよ」

「あんなもんにどうやって負けるんだよ。とりあえず座れ、時間がもつたいない」

新座の言葉を途中で切つて、パイポが部屋の中央のテーブルを指し示す。変わった形だ、と思つて近付くと、下の部分は廃棄されたカラーボックスが横倒しになつていて、その上にホワイトボードが載せられていた。パイポがテーブルの下からマーカーを一本取り出して口を開く。

「始めるぞ。昨日、新聞を作るのに五つ問題点を抱えてるつて言つたよな。そのうちの二つ

——『金』と『人員』は解決したから、あと三つだ」

そう言いながら、パイポがホワイトボードの表面に直接「1」「2」「3」と番号を書いた。まずは『紙と印刷』。これが大問題だ」

「1」という数字の横に「紙、印刷」と書き込みながら、パイポが部屋の隅から紙切れを取り上げる。見るとそれは、一組の学級新聞だった。机の上に広げると、水泳で記録を出した山根の写真がかなりの大きさでぼくらを見返す。

「考えてみたんだが、この新聞がプロっぽく見えるのは、A3の大きな紙に印刷して、半分

に折ってるからじゃないかと思う。一組には親がデザイン会社やってるやつがいるから、大きなプリンタを使わせてもらったんだろ。確かにこうすると新聞っぽいけど、こつちにあるのはあれだけだからな」

パイポはそう言つて、部屋の隅にある古びたプリンタを指さした。

「パソコン室のやつ、使えばいいんじゃないかね？」

オルツがわざわざ挙手して発言する。でも、パイポは首を横に振った。

「パソコン室も用紙サイズは変わらない。それに、あんなところで新聞作つてたら情報漏洩の危険性があるだろ」

それからパイポは「誰か機材持つてる奴いるか？」と続けたけど、当然三人とも持つていなかった。

「サイズつて、いくつならいいの？」

紙のサイズなんて考えてもいなかったから、尋ねる声が小さくなった。パイポがプリンタをちらつと見て答えた。

「あのプリンタに入る最大サイズは『A4』。でも、この紙はその倍の『A3』サイズだ。とても無理だ」

「半分に折つて、入れてみたらどうよ？」

プリンタの方を見ながら、オルツが提案する。パイポは首を横に振った。

「さつきやってみたが、ずれる。無理だ」

いつの間に手に入れていたのか、パイポはテーブルの下からもう一部、一組の新聞を取り出して、それをぼくに見せてきた。一ページ目を塗りつぶす形で、『誰がこんなもの読むんだ』と延々、コピペした文字が印刷されている。その文字は歪んで斜めになったあと、最後は途中で途切れていた。

「しかもこれだと、表裏全部刷るのに、一枚の紙を四回プリンタに通さないといけない。時間がかかりすぎるし、三面刷ったあとで最後の面がずれたら終わりだ。何十部も刷るには危険すぎる」

パイポがくしゃくしゃつと新聞を丸めて、横に放り捨てる。それを見て、もしかしたら内心、パイポも二組がバカにされているのに、ちよつとむかついているんじゃないかという気がした。

「じゃあ、A4で刷って、テープで貼り合わせるとか」

これは言ったあとですぐに後悔した。パイポがぼくの方をげっそりした顔で見たからだ。「ボ・ツ・だ。お前、ちゃんと想像して言ってる？ どれだけ格好悪い新聞作る気なんだよ」きつぱり告げられた「ボツ」の響きに、オルツと新座が堪えきれない様子で吹き出す。そ

の通りだった。改めて想像してみると、何枚かのテープで繋げ合わせた新聞が、ずれたりよれたり、角つこが折れ曲がったり、テープの隙間にほこりが付いていたりするのが頭に浮かんで、ぼくもげそつとなった。

パイポが「よつ」と言いながら立ち上がる。そして、窓の隙間から差し込んでくる光を横切りながら、ホワイトボードのテーブルの周りを静かに歩き始めた。

「とにかく、一組みたいな本格的な新聞っぽいものを作るなら、おれたちはこのプリンタだけで、どうにかしてA3の紙に印刷するしかないんだ」

頭を傾けて、吊つてあるUFOの模型を避けながらパイポが言う。新座が肩をすくめて返した。

「でも、どうやったって紙が入らないんじゃないや無理じゃね？」

そりやそうだ、とぼくも思った。無理なものは無理だ。オルツも無言でうなずいている。でも、パイポはあつさりそれを切り捨てた。

「無理とか簡単に言うな。何もやってないのに」

「だけど……」

「それより、もつと問題なのはソフトがないことだ」

パイポはプリンタをじつと見つめながら、テーブルの周りの二周目を周り始めた。

「一組の新聞みたいに、文字や写真を細かく縦書きで配置するには、専用の編集ソフトが必要だ。けど、もちろんうちにはそんなものない。あるのはしょぼいワープロソフトぐらいだ。それで新聞なんか作ったら、たぶん生田二丁の町内会ニュースみたいになる」

生田二丁に住んでる新座が「あー」と納得した声を上げた。ぼくは生田一丁だったのでそれは見たことがなかったけど、似たようなものはぼくの町内にもあった。町会長のおじさんが、カルチャーセンターで習ったパソコンで必死に作ったやつだ。

「じゃあ、どうするの？」

ぼくが心配そうにパイポを見上げて聞くと、パイポは不敵な笑みでこう答えた。

「工夫するんだ」

第二回編集会議②

「ともかく」

と、パイポは再びマーカを手にとつて、ホワイトボードの「2」の数字に丸をつけた。次の問題は『記事』だ。これが面白くないと話にならない。特に一面の記事は、大人でも

子供でも興味を持てるものじゃないとだめだ。だから、まずはそれ以外のところを考える」

パイポがマーカーでぼくらの方を指して言った。この「セーフハウス」に来て以来、パイポのペースに飲まれっぱなしで、何となく頭がぼうつとしてくるのを感じる。

「お前ら、クラスの連中が興味ありそうなこと、何でもいいから言ってみろ」

「えーと、クラン？」

オルツがいつもの調子で答えた。新座も首をひねりながら、ぼつぼつと返す。

「明日の給食とか？ ……体育で何やるか、とか」

「帰り道じゃんけんの勝者とか。あと、やつぱエロい話じゃねーの。新座は」

「なんでだよ！」

笑いながら、新座がオルツの肩を叩いた。何だかわいいわいとした雰囲気だったけど、ぼくは不安だった。そんなふざけた感じじゃ、また「ボツ」って言われちゃうよ——と、パイポの方を見ると、意外にもパイポはふんふんとうなずいて言った。

「なるほどな。じゃあ、オルツにはクランの攻略記事を描いてもらう。男子にとつて、絶対的な目玉だからな」

パイポが「クラン」とボードに書いて、その脇に「五十嵐」とオルツの本名を書いた。

「雑誌とかにまだ載ってない情報とか、何か持ってるか？」

パイポがサクサク話を進める。オルツは口を尖らせて返した。

「ゲーム雑誌とか読んでねーからわかんね。でも、レベル99の『グランマスターソード』の作り方なら知ってるけど、もう載ってる？」

「載ってるわけねえええ」

ぼくと新座が思わずハモった。レベル99って、何だそれ。何だそれ。

「てか、存在も知らないんだけど。何それ？」

新座は眉をひそめながら、疑わしげにオルツを見る。オルツは当たり前のように返した。

「アクパーラの伝説の剣だろ。知らねーの？ 全属性が+20になって、ライフ回復効果もあるからマジやべーよ」

「なんでその作り方、オルツが知ってたんだよ？」

新座が聞くと、オルツはきよんとして返した。

「いや、普通に持つてるからだけど」

ぼくは新座とちらつと視線を交わしながら、今の衝撃の発言を何とか飲み下そうとした。新座が座ったままずりずりと脇ににじり寄ってきて、ぼくの耳元で囁く。

「……おれ、そんなやつと対戦してたの？」

げそつとした顔だった。オルツと同じクラスになった男子、誰もが通る道だ。「うん」と、

うなずいて返すと、新座はいつそう項垂れた。

「やべー。おれ、さっきあいつにえらそうに戦術とか語っちゃったよ。死にてー」

そう言うと、新座は元の場所までまたとぼとぼ這って戻っていった。一方、パイポは今、どれだけオルツが小学六年生の男子にとつて衝撃的なことを言ったかなんて知ったことじゃないように、普通にオルツに指示を出している。

「じゃあ、そのこと適当に文章にして、一緒にその武器の画面をスクリーンショットで撮ってきてくれ」

オルツが「まあ、そんならいなら」と気軽に答える。思ったより簡単な役目が当たって安心した、つて顔だった。

「でも、クランの記事なんていいの？ 学級新聞だよ」

「小学六年生の新聞なんだから、六年生が興味持つこと書くのが当たり前だろ。あとは……給食と体育、エロい話か。そうだな……」

「それはもういいつてば」

思案顔で冗談をつぶやくパイポに、ぼくは笑いながら首を振った。新座も、ちよつと照れた様子で赤くなりながらへへへ、と笑う。

でも、パイポの言葉は冗談でもなんでもなかった。

「新座、おまえ、うちのクラスのどの女子が好きだ」

「な、なんでもいきなりそんなこと聞くんだよ」

突然の爆弾発言に、新座が赤くなつて返す。ちよつと声が上がっているのは、断じて気のせいではなかった。パイポはそんなことは意にも介さず、ポケットから禁煙パイポを取り出して続けた。

「戦略上、重要なポイントなんだ。恥ずかしがつてる場合か。六年二組の名誉がかかってんだろ」

パイポが禁煙パイポをくわえながら続ける。一瞬、やっぱりパイポも二組のことを考えてくれているんだ——と、喜びかけた。でも、よく見ると、その顔は冷静そのものだった。

「言えるわけないだろ」

気圧されて、新座が縮こまる。パイポが畳みかけるように言う。

「てことは、いるのはいるんだな」

「そんなこと言つてないよ」

「分かった。誰にも言わないからおれにだけ言え」

新座が赤くなつたまま、周囲をちらちら見回す。オルツは興味なさげにゲーム機の画面に顔を埋めていた。ぼくもそつと視線を逸らす。結局「リベンジしたいんだろ」というパイポ

の一言に押し切られて、新座はパイポの耳元でこそ誰かの名前を告げた。

「よし、企画がひとつ決まった。うちのクラスの水原の特集を組む」

「新座、水原さんが好きだったんだ」

思わず洩らしたぼくの一言に、新座が床に転がって、うおと悶絶した。分からなくもなかった。水原さんは他の六年生の女子よりもだいぶ大人っぽくて、男子からすると何となく、一番縁遠い存在だった。

「死んでやる。絶対死んでやるからな」

新座がダンゴムシのように丸まって、呪わしげに呻いている。ゲームに熱中していたはずのオルツがニヤニヤしながら、「そーかそーか、水原か」と足の先で新座に蹴りを入れていた。一方パイポは、何でもない表情でホワイトボードに「水原特集」と書き込んでいた。

「よし。これで大体半分は何とかなったな」

「ちよつと待つてよ。克蘭の記事があるのに、なんで半分なの？ グランマスターソードの作り方って相当すごいよ」

ぼくは不審な思いで言った。そんなものが載ってる学級新聞なんて、大人気に決まってる。ようやくパイポが言っていた「一年生から六年生まで欲しがる新聞」の意味が分かった。他の学年の新聞にそんな記事が載っていたら、ぼくだって欲しいに決まってる。それなのに、

たった半分なんて——と思ったところで、パイポが呆れた様子で言った。

「決まってるだろ。残り半分が女子だからだ。女子にクランは通用しない」

その言葉は、ぼくには全くの衝撃だった。

他の学年が読むつてことも考えていなかったけど、こっちはもつと想像していなかった。

すぐおかしい言い方をするけど、ぼくにとつて六年二組というのは十五人の男子のことだった。三戸さんのことで今回、初めてちよつと同じクラスの女子のことを考えたりもしたけど、それでもまだ「女子がこの新聞を読む」ということまで頭が回っていなかった。

「水原の特集なら女子受けもするかもしれないけど、分かんねーな。さすがにおれも、女子の読みたい記事つてどんなのか想像付かないからな」

「……じゃあ、どうするの？」

窓の日が延びて、ちようどぼくのほつぺたを温かく照らしてくる。ぼくはその日差しで何だかぼうつとしながら尋ねた。

「まずはリサーチだな。まあ、これで男子向け、女子向けの記事は大体決まった。あとは新座、去年スケッチの大会で賞取つてたよな？」

「まあ、一応。ほんとは色塗るの、あんま得意じゃないけど」

「それでいい。給食についての記事、イラスト入りで頼む。一年生も読めるような内容にし

たいからな」

「いいけど、内容は？」

「任せる。どうせここは抑えだ。無難にできてりやそれでいい」

新座がちよつとむつとした顔で、何か言いたそうに口を開く。でもそれを遮って、パイポが重々しく言った。

「問題は一面。トップの記事だ。ここで何をするかで、全て決まる」

これが、ぼくの悪夢の始まりだった。

学校への道程①

一時間後、ぼくとパイポは、自転車に乗って学校の方へと向かっていた。途中、生田駅の商店街に差し掛かると、すっかり寂れた商店街は土曜日なのにシーンとして、シャッターが目立っていた。その全体に薄暗くて冷えた雰囲気は、ちょうど今のぼくの気分とそっくりだった。

「ねえ、これからどうするの……？」

ぼくが聞くと、パイポは自転車を立ち漕ぎしながら答えた。

「言つたろ。今日と明日しか休みの日ないし、とりあえず最重要なのは一面だ」

「やつぱり……」ぼくは溜息をつきながら言つた。「……あれ、マジでやるの？」

「やるに決まつてる」

「まずいと思うけどな。絶対まずいよ。ぼくら呪われるよ」

「それで面白い記事ができるなら、安いもんだろ」

パイポは気にしない様子で、まっすぐ商店街を抜けていく。のろのろと追いかけるぼくの脳裏に、編集会議の後半の内容が浮かんた。

それはもう本当に、本当にあり得ない話だつた。

「一面の記事は、男子でも女子でも——いや、先生でも興味が持てるものじゃなきゃだめだ」
言いながら、パイポがホワイトボードに大きく「一面」と書いて丸で囲んだ。それを見て、

ぼくは聞かすにはいられなかった。

「でも、誰でも興味あるものってどんなの？」

「二つある」

パイポは少し間を作つて、ぼくら三人の顔を確認するように見た。それから、おもむろに続けた。

「怪談と宝探した」

横にいる新座と一瞬、視線を交わした。パイポはその間にホワイトボードに「怪談」と「宝探し」という文字を実際に書き出した。

「この二つは嫌いつてやつはいても、興味ないやつてのはいない」

パイポが言い切った。新座も興味が湧いてきたのか、横から口を開く。

「たしかにおれも好きだけど、記事とどう関係あんの？」

「そうだな……うちの学校にまつわる怪談って何か知らないか？」

パイポは少し首を傾げながらぼくらに聞いた。

「トイレの花子さんとか？」

ぼくが答えると、パイポはすぐに不機嫌な声になった。

「ボツだ。そんな誰でも知ってる全国区のものじゃなくて、生田小オリジナルのやつだ」

「大村、全部ボツだな。ボツ村に改名しろ」

オルツが横から、本気で傷付くヤジを飛ばす。そこへ新座が少し前に乗り出して言った。

「それなら女子から聞いたことあるよ」

なんとなくその感じが怖くて、ぼくは唾を飲んだ。確かにぼくだって怪談には興味がある。でも、同時に怖いのは大嫌いだった。寝られなくなるのを分かっている、なぜ毎回心霊番組

を見てしまうのか、ぼくが聞きたいぐらいだった。

「うちの学校って昔……墓場があつたところに建つてゐるらしいよ。特に運動場のブランコの下には伝染病で死んだ子供がいっぱい埋められてて、夜中に風もないのによくブランコが揺れるんだって」

ちよつと雰囲気を作りながら、新座が声を低めて語つた。背筋にぞつとしたものが走る。オルツも「まじで!？」とゲーム機から顔を上げた。

「怖えええええ!!」

「——うそだな」

二人して恐怖におののいていると、マーカールのキャップをパチンとはめながらパイポが言つた。

「生田小学校って、創立九十年だぞ。つてことは、それって最低でも九十年以上前のことだろ。その頃の生田って市の中心地だぞ。なんで疫病で死んだやつを町のだ真ん中に埋めるんだよ」

前に乗り出していた新座が気圧されたように、ちよつと身を引く。パイポの理論に、ぼくも納得せざるを得なかつた。

「じゃあ、だめだよね……」

怪談の記事はなし——と、喜んで記憶から消そうとする。でも、そんなぼくをパイポが止めた。

「誰もだめなんて言っていないだろ。ネタとしてはいい。どうせ怪談なんか全部うそなんだから、本当かどうかなんてどうでもいいんだ」

「パイポはお化け信じてないの？」

思わず、パイポに聞き返す。パイポは当たり前、というように肩をすくめた。

「いるかどうかなんてどっちも証明できないから、考えるのは時間の無駄だ。でも、人間が死んだとこでいちいち幽霊になってたら、世界中が『ウォーリーを探せ』みたいになるだろ。だいたい死んで幽霊になるんなら、なんで犬とか亀とかの幽霊がないんだよ。都合良すぎるだろ」

もちろん、幽霊なんていない方がいいに決まっていた。でも、パイポが否定するのを聞いているうちに、不思議と反論が浮かんできてくる。

「動物は人間みたいに、未練とか感じないからじゃないの？」

やはりみんなこういう話題に興味があるのか、新座もうんうん、とうなずきながら、いつの間にかまた身を乗り出してゐる。パイポの言う通りだった。怖い話が嫌いな人間なんていないかもしれない。

「じゃあ、百歩譲って人間だけが幽霊になれるでしょう。なんで一番身近で未練ありそうな身内の幽霊が見えないのに、崖から飛び降りた知らない女とかが見えるんだよ。おれのばあちゃん、おれが小一の時に死んだけど、まだちつとも姿見せないぞ。幽霊になって出てこれるんなら、ばあちゃん冷たいだろ」

これには何も言い返せなかった。何を言っても、パイポのおばあちゃんに悪い気がした。

「じゃあ、杉山は全然怖くないんだな」

少し意地の悪い感じで、新座が横から聞いた。でも、これにもパイポは冷静に答えた。

「そりゃ、ちよつとは怖いさ。夜や闇が怖いのは人間の本能だからな。でも、それは何百年も前の電気とかがない時代の本能が残ってるだけだ。今の時代なんて、もう夜を怖がる必要はないだろ」

パイポがそう言うのを聞いて、ぼくはちよつと納得しかけた。でもその途端、なぜか嫌な予感が胸いっぱいに広がってくる。

「この話……記事として書く？」

おそろおそろ、パイポに尋ねてみる。なんだかそんなことをしたら呪われそうで、もう二度とあのブランコに乗れない気がした。

「そうだな……大村、本当に本気で面白い新聞、作りたいんだよな？」

でも、パイポの口から返ってきた答えは、そんなぼくの想像をはるかに超えていた。

ぼくが瞬間冷凍されている間に、新座が「マジで？」とぼくの気持ちを代弁してくれた。

「二晩中って……電池もつの？ テープだって交換しなきゃいけないだろ」

ぼくがまだ固まっているうちに、新座がさらにぼくの代わりをしてくれる。

「そりゃ充電も交換も、自分でするしかないな」

たぶん、ぼくの顔は盛大に引き攣っているに違いなかった。しかもパイポが次に何を言いつて出するか本能的に悟つて、とつさに気配を消そうとしたが、なぜか真つ先にパイポと目が合つてしまう。

「大村。今夜うちに泊まるつて親に言つて、学校に來い」

「い、い、いやだよ!! それに、今夜なんてそんな急じゃなくても!」

引き彎った顔のまま、ぼくは後ずさりながら言った。あとで「ビビリ」の汚名を着せられ

るかもしれないけど、そんなことに構っていられなかった。深夜の学校にビデオカメラを持って、お化けが乗っているブランコを撮りにいくなんて、正気の沙汰じゃない。しかも一晩中とか——いやいやいやいや——あり得なかった。

「いやでもいいからこい。問題が三つあるつつつたろ。最後の問題は『時間』だ。新聞の締め切り、いつだと思ってる」

それを聞いて、ぼくは「あつ——」と口ごもった。締め切りは次の木曜日。土日が休みでも、あとほんの五日しかない。それでも、ぼくは諦めずに言い募った。

「だ、だって、幽霊怖いもん！ そんなブランコ一晩見るとかあり得ないよ！ 死ぬって。呪われて死ぬって。そうでなくても心臓麻痺とかでショック死するよ！ 別の人に——」

「や。おれ、克蘭の記事があるし」

「おれも給食の記事書かなきゃな。夜は塾だし」

がんばるぞー、とわざとらしいくらいにの棒読みで、オルツと新座が立ち上がって背筋を伸ばす。そして、薄情にも二人そろって窓の方へと向かい始めた。

「ちょ、ちよつと待つてよ！ 二人とも！」

「杉山、締め切りって月曜でいいわけ？」

「そうだな。昼にでももらえたら何とかなる」

「分かった。じゃあな、大村」

最後に聞こえたのは、オルツの「骨は拾ってやるからな」という一言だけだった。

中川文具店

「でも……どっちみち夜にならないと無理だよね？」

「当たり前だろ」

「じゃあ、なんで学校へ行くの？」

パイポに頼んだことと、一万円払ったことを同時に後悔しながら問いかける。と、パイポが「学校じゃない」とつぶやいて、商店街の真ん中でキイツと自転車にブレーキをかけた。

「ここに用があるんだ」

こんなところに——？ と、周囲を見回す。シャッターだらけの商店街。開いているのはおじさんたちがたまに行く青田理容室と、一応学校指定の文具店である中川文具店くらいのものであった。

「行くぞ」

パイポがそう言つて、自転車を下りた。仕方なく、ばくもチェーンでタイヤを電信柱に結び付ける。パイポの方は自転車のロックもかけずに離れていったので、ついでにパイポの自転車にもチェーンを通しておいた。パイポはまっすぐ中川文具店に向かつていく。

「文房具買うんだつたら、大通りのお店の方がいいよ。ここ、怖いおじさんがいるし」

パイポは聞いていなかった。代わりに、入口のガラスドアに貼られた「コピー八円」という貼り紙をちらつと見てから、ガラス戸を引き開けて文具店の中へと入つていった。

「ちよつと、パイポ！　ねえ！」

考える間もなく、あとを追つて文具店に足を踏み入れる。すぐに壁際に並んだ棚が目に飛び込んで、インクとほこりの混ざつた匂いが鼻を突いてきた。パイポはずんずん奥へと進んだ。そしてカウンターのところまで行くと、その向こうでおじさんがむくつと起き上がった。「なんだ、客か？」

おじさんは分厚い丸眼鏡をかけて、毛糸の帽子をかぶつていた。カウンターの奥には畳敷きの部分があつて、おじさんはいつもそこで横になつてテレビを見ていた。今もかすかにテレビの音が聞こえていたけど、何の番組かは聞き取れなかった。

「おじさん、コピー機使つていい？」

パイポがカウンターに肘を突いて言つた。おじさんがしかめっ面で返事をする。

「金払えばな」

間違つてもサービスなんて期待できそうもない雰囲気だった。ぼくはなんでパイポがこんなところに入ったのか、もう一度不思議に思わざるを得なかった。

「コピー代つて、紙のサイズどれでも八円？」

カウンターの側のコピー機を見ながら、パイポが聞いている。おじさんは眼鏡の位置を調整しながら、「ああ」と答えた。

「サービスだ。そこらのコンビニより安いぞ」

「紙の両面にコピーしたら、当然二枚分の値段だよね？」

「そりやそうだ」

パイポはポケットから小銭入れを取り出して、十円玉を一枚抜き取った。

「じゃあ、一部だけ刷らせて」

「はあ？ 一部だけならコンビニでもいいだろうが」

おじさんは実に面倒くさそうに畳から降りて、コピー機に向かった。言わなかったけど、ぼくも同感だった。だいたい、安いつて言っても二円の違いなんだし。

コピー機の「準備中」のランプが消えるまでの間、店内を見て回ると、棚のひとつにひとつに事務用品とか、スタンプやハンコ、墨汁、大きなサイズの紙などがきちんと並べられて

いた。ずっと昔から一度も売れていないような商品もたくさんあった。でも、そのどれにも、ほこりはぜんぜん積もっていなかった。

そのうちに、「大村、やるぞ」というパイポの声が店内に響く。コピー機のところへ戻ると、ランプが「印刷できます」に変わっている。

「何をコピーするの？」

ぼくが小声で尋ねると、パイポが「あ、そうか」と唇を尖らせて、周りを見た。そして、カウンターのう上にあつた合唱大会のチラシを取り上げて言った。

「これでいいや」

「これ？　なんでこんなの——？」

パイポは答えなかった。その代わりにコピー機のカバーを開け、ガラスの表面に顔を近づけて、じろじろとなめるように調べ始める。

「おい！　ガラス触るなよ！」

「触ってません」

後ろからおじさんの声がして、びくつと身を引いたけど、パイポは落ち着いてそう返した。そして、何かに納得したようにうなずくと、さっきの合唱大会のチラシをガラス面の角に合わせる。

「まったく、近頃の子供は——」

ガチャンという音で、パイポがコピー機のカバーを閉じる。そしてスイッチを押すのかと思ったら、パイポは機械の前面にあるプラスチックの蓋を開けて、その下にあるスイッチをいじり始めた。途端におじさんが「こら、勝手に触るんじゃない！」と慌てた様子で駆け寄ってくる。

「倍率上げただけです。壊したりしないから、心配しないで」

あまりに揺らぎない声で、パイポはそう答えた。おじさんが立ちすくんで、やがてまたカウンタに戻っていく。そうしているうちに設定が終わって、パイポが緑のボタンを押した。コピー機が低い音で動き出す。すぐにぼくの側から印刷された用紙が出てきた——けど、そっくり同じというわけじゃなかった。それは、コピー元のチラシよりもずっと大きな紙だった。

「すごい」

手に取ってひっくり返してみると、一組の学級新聞と同じ大きさだった。そこでぼくはようやくパイポの考えに気が付いた。簡単なことだった。A4で作って、A3に拡大すればいいんだ。

「すごいよ、パイポ！ これで新聞、印刷できるよ！」

やつぱり頼んでよかったかも——と現金な気持ちで、大きな声が出る。でも、ぼくの手から紙を受け取ったパイポは、それを電氣に透かすようにしてから、険しい表情を浮かべた。パイポは紙をひっくり返して、何度か印刷を確かめたあと、やがて肩を落とした。

「だめだ」そう言つて、パイポが印刷した紙を小さく折つてポケットにしまい込む。

「拡大したら、やつぱり文字も写真もぼけて読みにくくなる」

「でも、新聞つばいよ」

ぼくは紙を見返しながら言つた。確かに文字は少し滲んでいたけど、子供の新聞なら全然OKじゃないかと思つた。それにプリンタで印刷できない大きさだというだけで、なんとなく特別な感じはした。

「だめだ。読みにくかつたら新聞つぼくてもだめだ。それに大きくすると粗が目立つ。やつぱり、初めからこの大きさに印刷しなきゃだめだ」

「十分だと思うけどなあ」

パイポが「くそつ」とつぶやきながら、頭のとつぺんをがりがりとは掻きむしる。問題が解決したと思つていたぼくは、まだ諦めきれずにコピー機を見ていた。でも、パイポはあつさり合唱大会のチラシを元の位置に戻して、おじさんに向かって言つた。

「おじさん、今日のところは帰るよ。ありがとう」

それだけでパイポが背中を翻して、店の出入口へと歩き始める。ぼくも「待つてよ！」と、そのあとを追おうとした。でもそこで、パイポがふいに立ち止まった。

危うく背中に突っ込みそうになって、辛うじて足を止める。どうしたのかと思つて見ると、パイポの目は入口の脇に積んである、ゴミに出すらしい箱に釘付けだった。

何十年前のものなのか、日に焼けて色褪せた箱の表面には、「スーパ―戦隊スタンプセツト」という文字が読み取れる。パイポがしゃがみ込んで、そつと箱を開いた。中には、古いマンガかアニメのスタンプがたくさん入っていた。ご丁寧に、「一個三十円」という汚れたシールまで貼つてある。

「ふうん……」

スタンプの一つをつまみ上げながら、意味ありげにパイポが洩らす。それから、おじさんに向かつて尋ねた。

「おじさん、このスタンプ捨てるの？」

「大昔のものだからな。ほしかつたら、安く売つてやるぞ」

と、おじさんが冗談とも何ともつかない声で返事をしたので、ぼくはちよつとむつとした。こんなものを子供に売り付けるなんて、何かの犯罪になるんじゃないだろうか。でも、パイポの口から出たのは予想外の答えだった。

「分かった。考えとくから、これまだ捨てないで」

ゲイツ降臨

中川文具店を出ると、ぼくらは自転車で商店街を逆に進んだ。天平のある方向だ。本当にあの企画をやるつもりなんだろうか。そう考えると、心がずんと重くなる。この期に及んで、まだ信じられなかった——というより、信じたくなかった。

お店の手前に自転車を止めると、ベンチに低学年の子供たちが何人か座っているのが目に入る。カードゲームか何かの話をしているみたいだったけど、ぼくらの姿を見ると、その声がふと止まった。六年生だ、席、譲った方がいいかな——。そんな心の声が聞こえてくるみたいだった。

「パイポ、外行こう」

二十円の串カステラを買っているパイポの耳元でささやくと、パイポがちよつと不思議そうな顔をする。それから「別にいいけど」と、肩をすくめた。ぼくも自分の買い物を済ませ、さっさとお店を出る。ちよつと歩くと、東橋という小さな橋に行き当たった。

「ここはどう？」

と言つて、橋桁の上に座ると、パイポもうなずいて隣に腰を下ろした。傾きかけた日に、気持ち良い風が吹き抜けてくる。足元をさらさら流れる、名前も知らない小川が涼やかだった。

日差しがずいぶん温かくなっているのを感じながら、ベビーコーラを一口飲む。たまに蓋の裏に「アタリ」と書いてあるものがあつて、それが出ると二本ただでもらえるとオルツに聞いてから、毎回チェックするようにしていた。でも、蓋の裏はいつも真つ白だった。どうやらだまされているらしいことには気付いていたけど、やめられなかった。

コーラを飲み終えて上を見ると、パイポがさつき文具屋で取ったコピー紙を手にとって、じつと見つめていた。口には、串カステラを棒ごとくわえたままだった。しかも三つ刺さった串カステラは、二つ目から数が減っていない。かなり深く何かを考えているようだった。

ふと、パイポがくわえていた串カステラを棒ごと、「ん」とぼくの方に差し出してくる。くれるのかな、と思いながら受け取ると、パイポはポケットから禁煙パイポを一本取り出した。それを口の端にくわえ、コピー紙を見つめたまま、パイポは尚も考え込む。

時間はゆつくりと流れた。その間、ぼくは手の中のカステラの残りを食べていいものか迷いながら、ひたすら待つていた。足元を流れる川に、誰かが落としたスーパースポールが流れ

てくる。そして二つの石の間に挟まったかと思うと、しばらくもがいたあとにやつと抜け出した。パイポの声が聞こえたのは、ちょうどその時だった。

「大村」

隣を見ると、逆光の中でもパイポがはつきり笑みを浮かべているのが分かった。

「できるかも。A4のプリンタでA3の新聞」

「ほんとに——？」　ぼくは思わず橋桁から立ち上がった。「どうやって？」

パイポがさらに笑みを深める。口元の禁煙パイポが少し揺れた。

「まだやってみないと分からないけど、たぶんできる。おれはちよつと調べ物あるから本屋に行ってくる。お前は夜まで仮眠してこい。それで夜九時に学校のブランコ脇で落ち合おう」

「いや、でも」

夜九時。その響きに、一気に自分の顔が曇るのが分かった。夜中の運動場。お化けの出るブランコ。ビデオテープ。改めて考えると、ものすごく怖い取り合わせだ。思わずうつむいてしまうのを止められなかった。

「面白いもの作りたいんだろ」

「でも……」

「九時な」

念を押すように言ってから、パイポが串カステラを奪い返して、口に放り込む。そりゃあ、もちろん面白い新聞を作りたかった。言い出しつぺのぼくが一番がんばらないといけないのも分かってた。でも、なんでよりによつてお化け？ 今の段階で、すでにぼくは泣きそうだった。

無理。

誰がなんと言おうと、こればかりは絶対無理だ。

「やっぱり、ぼく——」

「やあ。奇遇だな。こんなところで」

言いかけた言葉を遮って、嫌な感じの声が響いた。足元には高級ブランドのスニーカー。顔を見なくても誰か分かって、気分はさらに最悪になる。すると、ぼくが何か言う前に、パイポが気軽な様子で口を開いた。

「なんだ、ゲイツか。何してんだ」

「その名前で呼ぶな!!」

ゲイツ。そうだ、そういうあだ名だった。言われてみれば確かに、そいつの顔はIT関係の超有名な人につくりだった。しかも口ぶりからすると、二人は知り合いみたいだ。ひよつとしたら去年、同じクラスだったのかもしれない。

「しょうがないだろ、似てるんだから。おれ、おまえ見るとパソコン立ち上げたくなるもん」

「似てないと言っているだろう！　いつもいつもバカにしゃがって……二組のくせに」

ポケットから吸入器を出しながら、ゲイツが言ってくる。それにかつとなつて、ぼくは大きな声で言った。

「ちよつと待つてよ。バカにしてるのはどつちだよ！」

そのまま二人の間に割り込んで、さらに声を上げる。

「あのメールだつて、おまえらだろ！　ひどいよ、あそこまでするなんて！」

「もう描かない」と言つて走り去つた三戸さんの表情を思い出すと、声が大きくなるのを止められなかった。ゲイツが吸入器を使うのも忘れて、不審そうな顔で首を傾げる。

「何——メール？」

「とぼけて——あれで三戸さんがどれだけ——」

その表情に、よけいに腹が立つて、ゲイツにつかみかかろうとする。でも、その前にパイポの手がぼくの肩口に伸びてきて、ぼくを止めた。

「なあ、ゲイツ。あの新聞つてさ、おれに對する当てつけなんだろ」

「ちが——」

パイポの言葉に、ゲイツの動きが止まる。顔を赤くして、口をばくばくさせている様子は、

本当に興奮したビル・ゲイツって感じだった。

「おまえ新聞の編集班じゃなかったらしいし。どうせ五年の時の理科の発表会のこと、まだ根に持ってたんだろ。あれは確かにおれが悪かった。だけど、いい加減しつこいだろう。どんな前だよ」

「そんなわけないだろう！　ぼくはただ、君たちの恥ずかしい新聞を見て、本当の新聞がどんなのか見せてやろうと思っただけだ！」

「あ……あんな新聞、誰も読んでないじゃないか！　親の力できれいに作っただけで、面白くもなんともないよ！」

思わず反論すると、ゲイツが吸入器を口に当ててシュツと吸う。そして、憎らしい様子で眉を片方上げて言ってきた。

「聞き捨てならないな。それじゃ何か、あの二組の後ろの壁に貼ってあるあれは面白いのか？　それは知らなかった」

うぐ、と思わず言葉に詰まる。ゲイツがさらに続けた。

「誤字だらけで、手書きの紙をホチキスで留めただけ。企画もセンスもお粗末な上、努力も見られない。それが面白いとは、ドラスティックな意見だな。思いも付かなかったよ」

これを聞いて、完全に沈黙するしかなかった。誰も見ていないと思っていたけど、やつぱ

り見ている人はいるんだ。しかも、いちばん見られたくない相手に。

もっと丁寧に作っていれば——と後悔が襲ってくる。せめて、字の間違いくらいは直しておくべきだった。でも、もう遅かった。

「悪いけど、ブレストの時間だから失礼するよ。まあ、スタッフがクレバーだから楽でいいけどね」

シュツ、ともう一度吸入器を使う音がする。ゲイツが踵を返した。その背中に向かって、パイポが「おい、ゲイツ」と、静かに声をかける。ゲイツの足が止まった。

「分かてると思うけど、その新聞、おれは何もしてないからな」

ゲイツは何も言わない。でも、肩の辺りが微妙に緊張しているように見えた。

「今回はおれが相手だ。また五年の時みたい泣かせてやるよ」

挑戦的な口調で、パイポがそう告げる。ちらつと見ると、その横顔には、いやな感じに楽しそうな笑みが浮かんでいた。

ゲイツは無言のまま、振り返ることなく歩き去る。それを見送りながら、ぼくは何故かちよつとだけ、ゲイツに対して同情が湧いてくるのを感じていた。

第三話

土曜日…夕方、夜

モアイ助けて

午後五時。

あああ、どうしよう。あと四時間で九時になってしまう。

パイポには「仮眠しとけ」って言われていたけど、ぼくは家に帰る気になれず、そのまま自転車ですばらく町内を回っていた。そのうちに宝田町の交差点を過ぎて、ふと気が付いた。「ここって……」

道の向こうに、古いお寺の屋根が見えている。そうだ。ここは、モアイの家のすぐ側だった。お化けに対抗できるものといったら——お寺だ！

そう思うや否や、ぼくは自転車を返して、交差点を住宅街の方へと入っていった。すぐに「乗願寺」の古めかしい門が視界に飛び込んでくる。ぼくは入口の傍らに自転車を止め、まっすぐに奥の本殿を目指した。片側に並んだ古いお墓は極力、見ないようにした。何しろ今夜はお墓どころか、そのお墓の中に入ってる人に会いに行くことになるかもしれないんだ。

モアイの家は、本殿の横にある大きな日本家屋だった。古い造りの、立派な木造のお屋敷は重々しい雰囲気放っていて、緊張しながら「吉田」と書かれている表札の下インターホンを鳴らす。しばらくして、お寺のお坊さんらしい袈裟姿の若い男の人が、「はい」と玄

関先に顔を出した。

「あの、吉田走くんいますか」

お坊さんは「ちよつと待ってね」と言つて、長い板張りの廊下を奥へ戻つていく。その袈裟のポケットからイヤホンの端がはみ出して、ロックの曲が音漏れしていた。でも、とりあえず気が付かなかったことにした。

「あれー、大村じゃないか」

数秒後、入れ替わりにモアイが廊下をやってくる。できればこつちにも袈裟を着てほしいかったけど、すでに普通のジャージ姿に着替えていた。仕方がない。ここはジャージで我慢することしよう、と腹を決める。

「あのさ、モアイ。すつごいお願いがあるんだ」

手を合わせて、ぼくに一礼するモアイに向かって切り出す。モアイが首を傾げて尋ねてきた。

「何？」

ぼくは唾を飲み込んだあと、周りを見渡して、誰も聞いていないことを確認した。特にお墓に入っている人たちに聞かれてはまずい気がした。

「あの……お祓いてやってくれない？」

「お祓い？」

「ほら。お坊さんがよくやるじゃない。白い紙がいつぱいついた棒で」

「大幣（おおぬさ）のこと？」

「それ。それでぼくのこと、祓（はら）ってほしいんだ」

普段はあまり表情の変わらないモアイが、「あれは修行中のぼくじゃできないよ」と、困った顔になる。

「本当に必要なら、住職か、ちゃんとしたお坊さんに頼まないと」

「いいんだ。ぼくはモアイを信じるよ」

そう言つて、モアイの手をつかんだ。ぼくの手は汗ばんで冷えていて、モアイの手が妙に温かく感じた。

「お願い。今日、お化けの動画撮りに、夜中に学校に行かないといけないんだ。切実なんだ。ぼくが呪われるかどうかの瀬戸際なんだ」

「なんでまたそんなこと……」

「学級新聞のためなんだ」

つかんだ手を放して言う、モアイは口をへの字に曲げて、「うーん」と唸（うな）った。

「事情がよく分からないけど、別にお祓（はら）いとかしなくても大丈夫だよ。学校にお化けなんていないと思うし」

「それがいるかもしれないの！」

その時、ちょうど玄関の側の壁に、掃除用のハタキが吊つてあるのが目に入った。ぼくはとつさにそのハタキを手に取り、モアイに向かって言った。

「じゃあ、これでいいよ。似てるし。これで祓つて」

と、ハタキを押し付けると、モアイが安然とした顔になる。ぼくは構わずそのまま玄関先にひざまずいて、頭を垂れた。

「早く早く」

「これ、いつもばあちゃんかホコリ取つてハタキだよ？」

「いい。モアイの霊力を信じるよ」

モアイはしばらくの間、ハタキを手にとって立ち尽くしていた。そのうちに、「まあ、どうしてもつて言うなら……」とつぶやきが聞こえてきて、モアイが姿勢を正すのが分かった。ゴホン、と咳払いがひとつ。きゅつと頭を下げて待つ。

モアイがハタキを上に掲げる気配がした。

詩のような歌のような、何か聞き取れない言葉が数秒間、モアイの口から発せられる。そのあとに、モアイがハタキをバサッバサッとぼくの頭の上で振った。頭上からホコリが振つてきて、くしゃみが出そうになったけど、必死に我慢した。

「はい。これでいい？」

「ありがとう！」

立ち上がると、ぼくは再びハタキを握っているモアイの手をつかんで、無理矢理握手した。それから思いつきり頭を下げる。

「ほんとに、ほんとにありがとう」

「こんなので大丈夫なの？」

「うん。これでもう怖くないよ！」

モアイはぼかんと口を開けていたけど、ぼくは勝手に納得していた。少なくとも、何かしら努力したことで、気持ちが落ち着いていた。

「今の、生田小の校歌だったんだけど……」

頭を掻きながら、何かつぶやいているモアイにぶんぶんと手を振り返して、乗願寺の門の方へ戻っていく。これできつと、お化けにも太刀打ちできる。もう怖くなかった。面白い新聞を作るんだ。一組にリベンジするんだ。

夜よ、来い——そんな気分だった。

決意

うそ。

五分もたなかった。

帰り道に公園の前のブランコをただで、ハタキのお祓いは一瞬で効力を失った。でも、日も暮れかけてきたし、夕飯までには帰ることになってるから、仕方なく家路を急いだ。

普段はこのくらいの時間になるとおながが空いて、あっちこっちの換気扇から漂ってくるカレーとか揚げ物とかの匂いがたまらなく感じられたけど、今日はそれもぼんやりとしか分からなかった。空を見上げると、すでにうつすらと月が出ているのが目に入る。来たるべき夜は避けられそうになかった。

いや——もちろん、まだ逃げるという選択肢はあつたけど。

そうだよ。だって、こんな悪いことだもの。ぼくみたいなまじめな子はこんなことしたらいけないんだ。道徳の時間にも、先生が「時には断ることが本当の友情」って言っていたきつと、ここは断るべきところなんだ。

断らなくても、風邪を引いたことにすればいいかもしれない。あるいは、うつかり寝てしまったとか。お母さんに見つかって怒られるというパターンもあるし、よく考えたら、いく

らでも使えそうな言い訳はあつた。

うん。

そうだ。そうしよう。パイポには悪いけど、それでいいじゃないか。

そんな風に思い始めてきた頃、生田二丁のコンビニの角を曲がった。そしてそこで、思わず自転車のブレーキを引いた。

ちやうどコンビニから、三戸さんがビニール袋を持って出てきたところだった。

「あつ——」

目が合うと、三戸さんはそう言ったきり、無言で顔を伏せた。その様子に、胸がずきつと痛みを訴える。三戸さんは女子の中では話しやすい人だったし、一緒に新聞を作っていた時にはよく笑っていた。先生に誉められた時には、一緒に喜んでくれた。それなのに、今はすごく壁を感じた。男子とか女子とか、そんなこと以上に、高くて越えられない壁だった。

三戸さんは気まずそうに頭を下げたまま、ぼくの方に向かって歩いてくる。そのまま、頭を上げることなく、三戸さんが脇を通り過ぎようとした。

何か言わなきゃ。

謝らなきゃ。

そう思っていたのに、ぼくの口は動かなかつた。その間に、三戸さんはぼくの自転車の横

を通り過ぎていた。後ろを振り返ると、三戸さんは角を過ぎたところで小走りになって、そのまま真っすぐに道を駆けていった。

ぼくはまたゆっくり自転車をこぎ始めて、コンビニの明かりの前を横切った。コンビニのまぶしい光が、消えた日の光の代わりに、自転車の影を長く後ろに伸ばしていた。

クラスの女子の中にはセンスがよくてきれいな子もいたし、そろばんが得意な子も、成績のいい子もいた。でも、三戸さんはそのどれでもなかった。だからこそ、三戸さんにとって、絵を描くことはとても大事なことであった。鈍感なぼくでも、それはよく分かった。

それなのに、「もう一度と絵は描かない」って、三戸さんは泣きながら言っていた。

気が付くと、手が痛くなるほどハンドルを握っていた。パイポの言う通りだった。呪われて面白い記事が書けるなら、それでいいじゃないか。お化けは怖かった。深夜の学校も恐ろしかった。

でも、コンビニから出てきた時の三戸さんの表情——あれが一生頭にこびりつくのに比べたら、きつとそんなもの、なんてことはなかった。

深夜の生田小学校①

数本の外灯と、薄く広がった月明かり。

九時を少し過ぎた頃には、生田小学校の周りはすっかり静まり返っていた。駅の前にはまだ開いているコンビニが一軒あったけど、大通りのこつち側では「今日」はもうとつくに終わっていた。

ぼくは誰にも見つからないように、学校の隣にある公民館の自転車置き場に自転車を止め、カバンを抱えて裏門の方へと向かった。門は当然閉まっていた。でもたいして高さはなかったのも、乗り越えようと思えば簡単だった。

でも、そこで考えた。ここから入ると、宿直室の真ん前を通ることになってしまう。

迷った末、外から運動場の方へ回ることにして、フェンスに沿って歩いた。そして体育倉庫の裏まで来ると、地面にしゃがみ込んだ。この部分だけフェンスの金網が外れていることは、生田小学校の生徒なら誰でも知っていた。

先にカバンを押し込んでから、金網の隙間をくぐる。夜の運動場はぼんやり青白く光っていて、一瞬ぼくの喉がひゅつと鳴った。向かい側にある藤棚に視線が行く。もし今、あの生い茂ったツタの間から何かが顔を出したら。死んだ子供の霊が覗いてたら――。

だめだめだめ。何、自分で自分を怖がらせてるんだ。

ぼくは首を振って、余計なことを考えないように努めて歩き出した。慣れた場所のはずの運動場は、外灯の光のせいもあって、いつもとは全然違う場所に思えた。このまま体育倉庫の脇を通り抜けて、運動場の正面に出たら、例のブランコがはつきり見えるはずだ。

唾を飲み込んで、ブランコが見える寸前で足を止める。頭の中に、腐った子供の死体がブランコに乗っているイメージが浮かんできて、泣きたくなった。

いい。それならそれで見てやる。見てやるんだ。

そう思って、ぐつと下唇を噛んで、体育倉庫の影から踏み出した。もちろんブランコには誰も乗っていないかった。それどころか、まったく誰も見当たらなかった。もしかしたら、ぼくだけ？——そんな新たな恐怖に、焦って周りを見渡す。すると、すぐに体育倉庫の向こう側から囁くような声が聞こえてきた。

「大村、こつちだ」

とつさにちよつと跳び上がったけど、パイポの声だった。見ると、校舎と体育倉庫の間の細い隙間に、ビデオカメラを持ったパイポが座っていた。どうやら、カメラの三脚を組み立てているところのようだった。

「遅いぞ」

「ごめん。お母さんに怪しまれないように、歯ブラシとか全部カバンに入れてたから」

そう言つて、ぼくはカバンをその場に置き、中からビニール袋を取り出した。

「これ。お母さんから差し入れ持つてけつて言われたから、コンビニでパン買つてきた」

と、菓子パンが入つたビニール袋をパイポに渡す。パイポはたいして関心がなさそうに「サンキュ」とだけつぶやいて、代わりにぼくに長く巻かれたコードの先を差し出した。

「花壇のそばに『A・3』つて書いてある外灯のポールがあるから、横に付いてる蓋開けて、このコンセント差し込んできてくれ」

「そんなところにコンセントがあるの？」

「理科の実習やつてる時に先生が使つてた。鍵は付いてなかったから、開くはずだ」

言われたとおりに、花壇まで延長コードを持つて走つていく。すると、確かにそこにコンセントがあつた。何日か前、ここで花の栽培の実習を受けたし、ぼくもこのすぐ側にしゃがみこんで実習を見ていた。それなのに、こんなことには気が付いていなかった。

「つないできたよ」

校舎の隙間に戻つて告げると、ビデオカメラの液晶を覗き込んでいたパイポがうなずいて返した。そのあとに、パイポがリュックから黄色いチョークを取り出す。何をするんだろう、と見てみると、パイポはそれで三脚の脚の周りの地面に丸を書いていた。カメラの位置がずれてしまわないためにやつているのだと気が付くまで、だいぶかつた。

「パイポって……なんでそんなにいろいろ知ってるの？」

そう問いかけずにはいられなかった。パイポはビデオカメラの位置をいじりながら、顔を上げずに答えた。

「別に知らねえよ。図書館とか、ネットで探せばいくらでも載ってるだろ。さすがに幽霊の撮影の仕方は見当たらなかったけど、固定したカメラで野鳥を撮る方法が載ってたから、それを参考にした」

ぼくはちよつとの間、黙った。きつとぼくが町内をうろうろしたり、モアイの所を回ったりしている間に、パイポは夜の準備をしていた。ぼくだって調べようと思えばできたのだからけど、何もしていなかった。

「ごめん」

ぼくがそう言うと、パイポは初めて機材から顔を上げて、ぼくを見た。

「なんで？」

「その……用意とか、手伝えなくて。このカメラ、どうしたの？」

パイポは一回瞬きをしたあと、また機材の調整に戻りながらぼつりとおぼやいた。

「家にあつた。親父のだよ」

「お父さんの？」

瞬きをひとつして、尋ね返す。パイポは「ああ」とうなずいた後、黙々と作業を続けた。ぼくは何となくそれ以上聞くことができず、その場に座り込みながら、めったに見ることのない夜の運動場を見回した。そうしていると、徐々にこの場所にも慣れてきた。最初に覚えた違和感はいぶ薄れて、昼休みに運動場にいる時の感覚に近くなっていた。

「よし、カメラはセットした。ここなら宿直室からも見えないし、ブランコは目の前だ。おまけに体育館の時計も画面に入るから、現在時刻も分かる」

その言葉で、カメラの液晶画面を覗き込むと、ブランコの映像が画面のほぼ中心に来ていた。暗い画面の中にぼつんと浮かび上がるブランコは、けっこう本気で怖くて、ちよつとだけ画面から目を逸らす。

ちよつとその時、フェンスの向こうから声がした。

「おい」

女子の声だ。驚いて顔を上げると、同じ組の吉岡さんと墨田さんが立っていた。二人とも大きなカバンを持っている。たぶん学習塾の帰り道なのだろう。

「ほんとにやってんだー。ごくろうさまー」

吉岡さんがこつちに向けて手を振りながら、ちよつと苦笑の混じった声で言った。隣で墨田さんもくすくす笑っている。ぼくは慌てて唇に指を一本当て、「しー！」と合図を返した。

吉岡さんは笑った顔のまま、今度は声に出さずに告げてきた。

「(がんばってねー)」

それだけで、吉岡さんが再びフェンス沿いに歩き出す。墨田さんは、その隣で手を振っていた。ぼくも軽く手を上げて応えたけど、そのあとちよつといやな気分になって、パイポに言った。

「なんか馬鹿にしていたよね、ぼくたちのこと。でも、なんで知ってたのかな？」

パイポは口元に薄い笑みを浮かべて言った。

「新座だろ。今日、塾で話すように言つといたんだ。特に吉岡に」

「なんでそんなこと——？」

「おれたちが実際にここにいたってことを、誰かに証明してもらいたかったんだ。吉岡と墨田の塾はいつも九時半頃までやってるから、きつと帰りに通るんじゃないかと踏んでた。とにかく、これでおれたちが二人で撮影してたって証拠ができた」

「なんでそんな証拠があるの？」

パイポの笑みが広がった。

「そりやもちろん、演出だよ」

「エンシュツって？」

本気で分からなくて、ぼくは首を傾げた。パイポが「つたく——」と、面倒そうな顔になる。それから、ぼくが持つてきたコンビニのビニール袋を手につけて、それを目の前にぶら下げて見せた。

「このコンビニの袋、この状態だと、いかにも食べ物が入ってるように見えるだろ」

見えるも何も、実際に菓子パンが入っていた。ぼくがうなずいて返すと、パイポはビニール袋の持ち手をきゅつと結んで、それをいきなり地面の上に置いた。

「でも、こうすると、ゴミが入ってるように見えないか？」

本当だった。ビニール袋は、生ゴミが入っているようにしか見えなかった。

「何も変わってないのに、見せ方だけで印象が変わるものって多いんだ。それが演出。ここにおれたちが一晩中いるのもそういうこと。幽霊が出て出なくても、こんなことやってるっただけで、なんか興味がわくだろ」

そう言ったあと、パイポはカメラの側面にマイクを差して立ち上がった。そして、カメラとブランコの位置を確認すると、その間の地面にチョークでサツと黄色い線を一本引いた。

「始めるぞ。合図するから、録画ボタン押してくれ」

「了解」

長い夜が、始まるうとしていた。

深夜の生田小学校②

パイポは黄色い線の上に立つと、マイクを口元に掲げて、左手の指を三本だけ上げた。

「3」

と言いながら、パイポが指を一本折る。意味を理解して、ぼくはカメラの赤いボタンに手をかけた。

「2」

次の指が折れる。ごくつと息を詰めた。次の瞬間、最後の一本の指が折れるのを見て、すかさず録画ボタンを押した。

「録画中」の赤いランプが、暗闇にはつきりと点灯する。パイポは数秒ほど間を空けてから、マイクに向かつて静かに語り始めた。

「みなさん、こんばんは。夜十時の運動場から、生田小学校新聞編集長の杉山工作が中継でお送りします」

気のせいかな、パイポの声はいつもより低くて、大人っぽかった。まるで本物のニュースキャ

スターみたいで、思わず聞き入ってしまう。

「今日は生田小学校に伝わる『独りで揺れるブランコ』の噂を検証するために、我々新聞製作班は決死の取材を敢行しています。これから明け方まで、固定カメラで後ろにあるブランコを撮影し続け、本当にブランコが揺れるのか確かめようと思います。尚、今夜はこの通り――」

言いながら、パイポはポケットから紐に結んだ五円玉を取り出し、カメラの前に垂らして見せた。

「――まったく風もないので、ブランコは揺れるはずがありません。みなさんも一緒にご確認ください」

確かに五円玉はぴくりとも動いていなかった。風はない。これも、ぼくは気が付いていないことだった。

「それでは、ここからは朝の三時まで早回しでお送りします。果たして、死んだ子供の霊は現れるのか？ 目を凝らして、我々と一緒にブランコを見ていて下さい。それでは、またあとでお会いしましょう」

そう言つて、パイポは軽く一礼をしてからマイクのスイッチを切つて、画面の外へと踏み出した。

「撮れたか？」

「ばっちり」

パイポがいなくなった画面は、なんとも不気味な雰囲気だった。液晶画面を通さずに見た風景はそうでもないのに、画面の中の映像は別世界のように怖く見えた。

「すごい怖いんだけど、これ」

「後ろの家の明かりとか、自動販売機の光とかが見えないように撮ってるからな。それも一種の演出だよ。テレビとか信じるなってことだ」

言われてみれば、カメラに映っている映像は実際の景色よりも青みがかって、寒々しい感じになっていた。お父さんがデジカメで撮った写真が、たまに設定を間違えてこんな感じに映っていることがあったけど、これもパイポがわざとやったことだった。

不思議だった。パイポの言葉を聞いたあとでは、ぼくもブランコから目が離せなくなっていた。怖いというのはもちろんあったけど、また違うドキドキが胸の奥から込み上げてくるのを感じる。もし動いたら……もし動いたら、すごいことなんじゃないだろうか。それをぼくらがカメラに撮ってしまったら。確かにこのビデオを観るのは、かなり面白いかもしれない。パイポが持ってきたリユックから毛布を取り出す。そして、そのうちの一枚をぼくに投げつけてよこした。

「天気予報は寒くならないって言ってたけど、寝るんならくるまった方がいいぞ」

パイポがそう言つて、自分も毛布を肩から羽織つた。

「本当に朝まで撮るつもり？」

「少なくとも、三時ぐらいまではな。そうじゃないと説得力ないだろ」

そう言つたきり、パイポはカメラから関心を失つたように壁にもたれかけて、分厚い本に顔を埋めた。タイトルを見ると『新しい時代のマーケティング戦術』と書いてあつた。

「ねえ」

「ん？」

小声で言つたつもりなのに、ぼくの声は暗闇に大きく響いた。パイポが本から顔を上げてこつちを向く。ビデオカメラの回る低い音が、やけに耳について聞こえた。

「その……ありがとう。手伝つてくれて」

いろいろ言いたかつたけど、結局口から出たのはそれだけだった。パイポが肩をすくめて返す。

「一万円で雇われただけだよ、おれは」

それだけ言つて、パイポはまた本に顔を埋めた。ぼくはちつとも眠くなかつたけど、とりあえず毛布にくるまって、目を閉じた。

しばらくの間、時々車の音や酔っぱらいの声が耳に届いていた。でも、深夜零時を回る頃には、それも完全に途絶えた。ぼくはいつの間にか少し眠っていたみたいで、目を覚ました時には、パイポは相変わらず壁にもたれて本を読んでいた。前の一冊はすでに読み終えたくしく、タイトルは『イメーজ戦略で不況を乗り切る』というものに変わっていた。

一度ビデオテープを交換したあと、持ってきた菓子パンを二人で食べた。いつもお母さんが買ってくるのと同じ、チョコチップの入ったメロンパンなのに、何だか違う味がするのが不思議だった。パイポはぼくが適当に買った春の新品、桜ポタージュパンというのを、微妙な表情でかじっていた。そうしながら周囲を見回すと、周りのどの家からもとつくに窓の明かりが消えていた。ただ青白い外灯の光だけが、ぼんやり陸上のトラックを照らし出して、怖いほどの静けさが辺りに満ちている。まるで誰かが世界を動かすリモコンの一時停止ボタンをうっかり押したかのようなだった。

これって、きつと「普通」じゃない。

突然、そんな考えが胸の内に湧き上がってくる。いつもクラスの中の、「普通」の一人でしかなかったぼくなのに、今はほんのちよつとだけ自分が「特別」だと思えた。

運動場の真ん中には、いつも朝礼で校長先生が立っている演台があった。その後ろにチューリップの植木鉢が並んでいて、月明かりに照らされた三色のチューリップはとても鮮やか

だった。通い慣れている校舎はとても古びて見えて、まるで世界から忘れ去られた廃墟を思わせた。

もし怖さに負けて逃げていたら、卒業まで一度もこんな生田小学校の姿を見ることはなかった。

夜中にこっそり家を抜け出すのは悪いことだし、あとで怒られるのも怖かった。でも、ぼくはたぶん大人になってからも長い間、この景色を思い出すんじゃないだろうか——そう思った。

運動場がぼんやりと青く光る夜。ちよつぱり非現実的な時間。

もしかしたら少しルールを破った方が、見えてくるものがあるのかもしれない。

そう考えながら、パイポはどんな風に思っているんだろう、とパイポの方を伺ったけど、パイポはただじつと本を読み続けていた。静かな夜は、もうしばらく続きそうだった。

深夜の生田小学校③

それからずいぶん経って、ぼくが暇潰しに持ってきたゲーム機を抱えたまま、うつらうつ

らしていた頃だった。

「大村、起きろ。そろそろやるぞ」

危なくこぼれかけたよだれを袖で拭いながら、ぼくは寝ぼけ気味に聞いた。

「やるって……何を？」

「演出だよ。何度言えばいいんだ」

そう言いながら、パイポがぼくを引っ張り起こしてくる。

「これで終わっても、つまらないだろ。さっさと起きろ」

立ち上がって目をこすると、驚いたことに時計は午前三時近くなっていた。どうりで身体が冷たくなっている。動き出すと全身がぶるつと震えた。急いでその場で足踏みをして、手足を温める。

パイポはぼくについてくるように手で合図して、体育倉庫の反対側に回り込んだ。まだ完全に目が覚めていない状態で後を追うと、ブランコのすぐ裏に出る。そこまで来るとパイポは急にしやがみ込んで、地面を注視しながら前に進み始めた。

「何してるの？」

そう言つて踏み出そうとしたぼくを、パイポが勢いよく制する。

「動くな！」

「どうして――」

と、言いかけた時、足元に書かれた黄色いチョークの線に気が付いた。

「さつき調べた。この線から向こうに入ると、カメラに映るんだ」

パイポが四つん這いの状態で、地面の砂をゆつくり、掌で探るように払いのけ始める。そのうちに何かを見つけたみたいで、パイポが「これだ」と言いながらぼくの方へ向き直った。ゆつくりとパイポが右手を引く。すると、地面の砂がいきなり静かに割れた。一瞬、びつくりして固まっていると、その割れ目がどンドンブランコの方へ走り出す。やつと何が起きているか分かった。パイポは右手に黒い糸を持っていた。地面に埋められていたその糸は、ちよほどブランコの所まで繋がっていた。

「ちよつと早く来て埋めといた」

ブランコの近くまで糸が現れると、パイポが引つ張る手を止めて言った。それから、糸の端をぼくに慎重に手渡してくる。

「ここで待機してて、おれがマイクで話し始めたら、ゆつくり十五まで数えてこの糸を引くんだ。ゆつくりだぞ。あんまり派手に引くな。ブランコがほんの少し揺れるだけでいいから」
「それって……インチキじゃないの？」

パイポの意図に気が付いて、戸惑った声を上げる。パイポは何でもない様子で答えた。

「何度言ったら分かるんだ。演出だよ」

それだけで、パイポはあっさりカメラのところへ戻っていった。仕方なく、糸の端を人差し指の周りに一周巻き付ける。よく見ると、マジックで塗ったらしい糸は少しまだらになっていた。

パイポがマイクを手にはカメラの横に現れて、ぼくの方に「OKか？」という合図を指で送ってくる。ぼくはうつかり糸を引っ張らないように気をつけながら、指で丸を作ってパイポに合図を返した。すると、パイポはおもむろに歩き出し、前と同じ位置で立ち止まると、カメラに向かってしゃべり始めた。

「というわけで、再び現場から杉山です」

ゆっくり十五まで——と、意識しながら、ぼくも頭の中で数を数え始める。

一、二、三……。

「すでに撮影を初めて五時間が経過しようとしています、未だブランコは揺れる気配がありません。我々製作班はその間ずっとブランコを見張っていましたが、何一つ異変はありませんでした」

八、九、十……。

糸を持つ手がうつすらと汗ばむ。パイポはぼくが「十二」にたどり着いた辺りで、また紐

に結んだ五円玉を前に垂らした。

「この通り、風はありません。残念ながらブランコは一度も動かず、生田小学校の怪談はたった今——」

……十五。

ゆつくり糸をたぐると、地面に埋まっていた糸がすーっと延びて、ほんのわずかにブランコを揺らした。

でも、パイポはそれに気付いた様子もなく続けた。

「——うそであつたことが証明されたのです。これでもう二度とこの噂が広がることもないでしょう。安心してブランコを使いましょう。それではみなさん、ありがとうございました。深夜の運動場より、杉山でした」

そう言つて、マイクのスイッチを切りながら、パイポはカメラの横へ退場した。もしかしたら、わずかすぎて分からなかったのかも——ぼくは我慢しきれず、ポケットにしまつていたゲーム機に糸を巻き付けてその場に置いたあと、急いでパイポの所へ走つて戻つた。

「パイポ！ 今、動かしたよ！ なんて動かなかつたつて——」

ちやうどビデオのスイッチを切っていたパイポが、ちらつとぼくの方を向く。

「いいんだよ、あれで」

それから、パイポはビデオを少しだけ巻き戻して、自分の後ろで揺れているブランコの様子を確かめた。ぼくも横から覗き込んだけど、揺らし方があまりにも小さくて、画面ではほとんど分からなかった。おまけにパイポの背中にブランコが半分ほど隠れていたので、よっぽど注意しないとブランコが動くのは見えなかった。

「やっぱり、ちよつと弱すぎたね」

「いや。ばつちりだ」

満足した様子で、パイポが液晶画面をパタンと閉じる。

「気付かないやつが多いほど、気が付いた時が怖いんだ」

「でも——」

と、言いかけたぼくを遮って、パイポは一気に疲れが出た様子で溜息を吐いた。それから、コキコキと音をさせて肩を回しながら告げてくる。

「見回りでも通りかかると厄介だから、さつさと片付けるぞ。大村は今家に帰ったら変だから、セーフハウスで寝とけ」

そう言えば、ぼくと違ってパイポは一睡もせず、ビデオのテープを交換していたはずだった。さすがに身体が重たそうに、パイポがカメラを三脚から取り外し始める。ぼくも慌てて手伝った。

撤収はそんなに時間がかからなかった。三時十五分を過ぎた頃には、大体すべての機材は元通りパイポのリュックに収まった。最後にパイポがブランコから糸を外している間、ぼくはチョークの跡を足で消した。そうしながらブランコを見たけど、もう怖い感じはしなかった。お化けや幽霊っていうものがこの世にいるのかどうか、まだ分からなかったけど、たぶんここにはいなかった。ここはただのぼくらの運動場だった。

「よし。行くぞ」

その声で、ぼくらは荷物を持ってフェンスの切れ目へと向かった。でも、そこから出ようとして、ふと立ち止まった。

後ろを振り返る。外灯に照らされた運動場と、そこに佇むブランコ。誰もいない、静かな夜の世界。

すでにフェンスの向こう側に出たパイポが、「大村」とぼくをうながしてくる。でも、ぼくはなんとなく、この夜が終わってしまうのがもったいないと感じていた。明日になれば、同じ場所に立つても、きつと同じ気分にはならないだろう。時間が止まったようなこの夜は終わって、また普通の時間が流れ出す。パイポが言っていた「演出」。見え方によつて変わるもの。

それはきつと、こんな風に――。

「大村、何してんだよ」

パイポが苛立つたように重ねて言った。

ぼくは名残惜しい気持ちを抑え込んで、「うん」と言いながら、青白い光に照らされた運動場をあとにした。幽霊はいなかった。でも、もつと不思議なものを見ることができた気がした。

続きは二〇一九年春公開予定！
乞うご期待！！



制作



studio
ET CETERA